

経 済 民 生 常 任 委 員 会 記 録

平成 30 年 8 月 29 日(水)午後 1 時 30 分～午後 4 時 11 分(9 階 908 会議室)

○出席委員(9名)

委員 長	石原洋三郎	副委員 長	誉田 憲孝
委 員	佐々木 優	委 員	後藤 善次
委 員	斎藤 正臣	委 員	黒沢 仁
委 員	佐久間行夫	委 員	山岸 清
委 員	渡辺 敏彦		

○欠席委員(なし)

○市長等部局出席者(なし)

○議 題

「地域密着型プロスポーツチームとの連携による地域の活性化に関する調査」

(1) 参考人招致

株式会社 A C 福島ユナイテッド

代表取締役 鈴木 勇人 氏

(2) 意見開陳

(3) その他

午後 1 時 30 分 開 議

(石原洋三郎委員長) ただいまから経済民生常任委員会を開会いたします。

議題は、お手元に配付の印刷物のとおりです。

初めに、参考人招致を議題といたします。

本日の参考人招致は、福島ユナイテッド F C の活動と地域での役割について、また福島ユナイテッド F C の今後の目標と地域活性化に向けた事業展望についてなどを聴取するため、株式会社 A C 福島ユナイテッド代表取締役、鈴木勇人氏にお越しいただいております。

参考人招致に関して注意事項を申し上げます。①、参考人はあらかじめ依頼した事項、事前質問について意見を準備して出席します。そのため、事前質問以外の事項について意見を求めた場合、委員

長は委員の発言を制止することができますので、ご了承願います。ただし、参考人の了承を得られるならば意見を求めることができます。

②、参考人招致には証人と異なり、百条調査のような強制力がなく、委員から依頼して出席を求めるものですので、参考人に対し礼節を尽くし、追及するような質問をしないでください。

③、本日のスケジュールは参考人招致実施要領及び次第のとおりです。スムーズな議事進行にご協力をお願いしますとともに、せっかくの機会ですので、有意義な会議になるよう活発なご質問をお願いします。意見の開陳についてはそれぞれ約60分、質疑応答に約30分、合計90分以内で行います。

参考人招致終了後に、次第のとおり、意見開陳を委員のみで行います。

また、前回の委員会で皆様からご意見のあったクラブの経営状況について、会津若松市からの支援、連携体制についてといった部分については、あらかじめ参考人に伝えており、聴取項目の中で触れていただくよう依頼しております。

なお、お手元の参考人実施要領については、前回委員会で確認したものから内容の変更はございませんでしたので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、参考人をご案内してまいりますので、暫時休憩いたします。

午後 1 時33分 休 憩

午後 1 時38分 再 開

(石原洋三郎委員長) それでは、委員会を再開いたします。

本日は、参考人として、実際に本市をホームタウンとして活動が続ける地域密着型プロサッカーチームからのご意見を聴取するため、株式会社AC福島ユナイテッド代表取締役、鈴木勇人様にご出席をいただいております。

この際、参考人に一言ご挨拶を申し上げます。本日はお忙しい中お越しいただきまして、誠にありがとうございます。深く感謝を申し上げる次第でございます。経済民生常任委員会といたしましては、農林業あるいは商工観光をはじめとしまして、地域経済の活性化ということが大きなテーマ、役割になっているところでもございます。そういった地域の活性化という視点において、地域密着型プロスポーツチームとの連携というものが大きな課題ではないかということで、今回テーマに、所管事務調査に選定をさせていただいた次第であります。プロスポーツチームの実際の現場の声をいろいろと教えていただければと思いますので、ぜひご忌憚のないご意見をよろしく願いいたします。

早速ですが、議事の順序等について申し上げます。初めに、参考人からご意見をお述べいただき、その後、委員の質疑にお答えいただくようお願いいたします。

それでは、参考人からご発言をお願いいたします。着席のままお話しいただければと思います。

(鈴木勇人参考人) 本日はこのような機会にお呼びいただきまして、本当にありがとうございます。また、常日頃から福島ユナイテッドFCの活動にご理解、そしてご支援を賜りまして、厚くお礼を申

上げたいというふうに思っております。このたび経済民生常任委員会ということで呼びいただきまして、まずはクラブの今現在の現状というものを皆さんと共有をさせていただいて、このクラブが何とか地域の活性化、福島市の活性化につながるような役割になればいいなという思いで私どもクラブスタッフ、選手一同活動しておりますので、ぜひとも今後の活動に際しまして参考になれば幸いです。

では、座ってお話をさせていただきます。よろしく願いいたします。まず、タイトルでございますが、地域の活性化につながるクラブづくりということで、どうしてもJリーグ、Jリーグということでトップチームばかりが目につく形になりますが、私どもこの地域の活性化というのをかなり意識をさせていただいて活動しております。しかしながら、地方のクラブでございますので、さまざまな課題もあります。そんな中でぜひとも皆様方と一緒に作り上げていくというところを今回のテーマとさせていただいております。

まず、震災の直後、私が、知っている方もいらっしゃると思いますが、別な会社、建築の設計事務所も持っておりますが、その中である日突然まさかの代表就任という形になりました。あれから7年ということで、なぜこの福島ユナイテッドという選択をしたかというところを後ほどお話をさせていただきますが、この写真は実は震災の直後のものです。初めて東北リーグで優勝したときの写真で、そのときは福島県内でサッカーというのは1年間クローズ、原発の影響で外ではサッカーしてはいけませんというサッカー協会からの規定がありまして、紫波町のほうで我々のホームゲームをやらせていただいたというときの写真で、初優勝した写真です。福島から多くのサポーターとクラブスタッフが喜びを分かち合ったという写真でございます。

今現在7年たちまして、我々の言い方としましては、地域に必要とされるクラブづくりということを行っています。地域に根差すという言葉は簡単なのですが、やはり必要とされるというのが大事でございます。おかげさまで福島県で初めてJリーグクラブとなりました。そして、7年たち、クラブ関係者は約500名、トップチーム、アカデミー、そしてスクールまで県内全域で持っています。スポンサー企業、これも約450社まで上がっております。個人サポータークラブ約3,500名ということで、この450、3,500というのは、我々Jリーグの中でまだ3部リーグなのですが、J2の中でも中間ぐらいの数でございます。そういう意味では、かなり皆さんの思いが結集されているクラブではないかなと思っております。また、最近ではボランティアということで大学生はじめ一般の方々もお越しいただき、ホームゲームの運営のお手伝いをいただいております。登録数は約500名という形になります。

理念としましては、サッカーを通してということではなくて、スポーツを通してということを行っています。福島を元気に、子供たちに夢、そして世界に誇れる福島を創造するという形が我々のクラブの理念でございます。

今シーズン、2018シーズンですが、元日本代表の田坂和昭氏を招聘いたしまして2年目です。非常に熱い、いい方で、正直お金では動かない方です。もともと中田英寿さんとかとプレーをして、天皇

杯までとったことがあります。J1、J2のクラブで監督もしていた方が福島の思いに応えていただいて、何とか一緒に盛り上げていきたいと思います。非常に負けず嫌いで、ひたむきにやるというのが非常に大事で、負けない気持ちと、特に選手教育には定評がありまして、アカデミーを指導したこともございますので、プロとしての準備というところを、今若い選手が相当伸びてきているというのはこの監督のおかげかなというふうに思っています。

後半戦始まりまして、1試合目敗れてしまいましたけれども、今現在6位ということで、負けない、J1、J2、J3含めて全部の中で負けが一番少ないというのがうちのクラブでございますが、これが一つでも勝てるようにこれから頑張っていくというところで、去年は10位でございましたので、今現在6位ということで、何とか2位以内というところを目指して今活動しているというのが状況でございます。

しかしながら、ことし優勝してもJ2という上のリーグには上がりません。残念でございます。これにはクラブライセンスというのがあります。これはJ3、J2、J1ごとにライセンスが決定していきまして、J2に上がるためにはこの4つの大きな課題をクリアしなければならないという形になります。

まずは経営です。3期連続赤字になりますとJリーグから剥奪されます。そういう意味では、経営を安定しなければならないというのが一番です。

クラブの環境、これは皆様もご存じかと思いますが、ホームスタジアム、そして専用練習場というのがライセンスの基準でございます。毎年毎年更新でヒアリングをし、Jリーグが福島にお越しただいて話をしています。その中では、この赤い文字のところはいつも議論が上がって、その対応策を求められているというのが現状でございます。特に練習場に関しましては、市議会の皆様の議論のもとにおかげさまで十六沼公園の天然芝ということで、本当にありがとうございます。これは我々だけではなくてサッカー界皆さんの悲願でございまして、そういう面でもこれから着実に環境がそろっていくのではないかなというふうに思います。

クラブの組織、ユースチーム、高校生チームを持たなければならないということもございます。

そのほか平均入場者ということで、今現在平均入場者は1,600程度です。これを何とかことし中に2,000名に上げて、最終的には3,000名を目指すというところがございます。こういうところから地域の活性化につながるクラブづくりとあわせてクラブの課題を一つ一つ皆様と一緒にクリアしていくというのが大事になってくるということです。

ここから皆様方から意見聴取をする内容ということで、前半戦は我々ユナイテッドの活動と地域の役割を話をさせていただき、後半にその後の今後の目標ですとか、地域活性化に向けての事業展望をお話をさせていただきます。重複する部分がございますので、なるべくこの1から4に当てはまるように準備をしてきたつもりでございますので、よろしく願いいたします。

まず理念に入る前に、サッカー界というのを少しお話をします。世界も含めてサッカー界はピラミ

ッドになっています。いわゆる福島県リーグというのがございます。この下には実は県北リーグとか地区リーグというのはもっともっと底辺は広いです。そこから上がりますと地域リーグ、いわゆる東北リーグという形になります。そこでアマチュア最高峰のJFL、そこから上がったものがJ3、J2、J1という形になりまして、J1、18、J2、22、J3が17という形で、ここまでがJリーグのプロという形になります。今まで私どもは県の3部から上がってきましたので、本当に一つ一つステップアップをしてきました。そういう意味では、Jリーグの理念を持つ最後のクラブというふうにも言われております。そんな中でこの東北リーグからJFLに上がるのが非常に辛い状況です。ここからここに上がるためには観客を入れる、いわゆる入場料収入が取れないという形ですし、全国リーグでございませぬので、非常にスポンサーが集めにくいというところで、過去福島県内では幾多のクラブがJリーグを目指してやってきましたが、特に郡山近辺のクラブに対しては3クラブほど消滅をしています。そのぐらいここからJFLに上がるというのが大変な状況でございます。皆様のご支援を得てJFL、そして今現在J3にいるという形でございます。

このピラミッドは、やはり底辺が大きくなればなるほど頂点が上がってきます。ですから、日本サッカー界も昔は、二、三十年前はワールドカップに出たことがなかったぐらいだったのですが、子供たちの育成等を念入りにやったおかげで底辺が大きくなりまして、日本代表チームが強くなっていったということがございますので、Jリーグ全体もそうですし、クラブとしても全く同じようなピラミッドになっています。今現在トップチームはJ2を目指しておりますが、県内各地で今300名ほど、4歳から12歳ということでスクールをやっています。自分たちのチームを持ってしまして、ジュニアが福島の県リーグ、そしてジュニアユースという中学生がみちのくリーグ、いわゆる東北リーグで戦っております。そこでユースチームを本来持たないと本当の育成型のクラブにはなりません。しかしながら、練習環境を含めてまだまだ高校サッカーというのも非常に根強い人気がございますので、今サッカー協会の皆様とどんな形でユースチームをつくったほうがクラブ全体あるいは県内全体の強化になるかということをご協議中でございます。これをクリアして初めて育成型の本当のピラミッドができ、福島自前の選手が少しずつ上に上がってトップチームに行き、トップチームから日本代表を目指すような選手が出てくるというのは、実はこのピラミッドが完成してからという形かなというふうに思っています。

ここで、Jリーグの理念です。3つございまして、川淵三郎元チェアマンから始まったJリーグでございまして、私のほうも社長になりますと、このJリーグの理念を見ないで川淵さんの前で10回連続で唱えないと帰ることができないぐらいこの理念が大事だというふうに使われております。まず、サッカー界、1つ目は水準とか、サッカーに関することですが、2つ目、豊かなスポーツ文化の振興及び国民の心身の健全な発達への寄与というのがございまして、下に国際社会とございまして、一番大事なものがこの2番目の豊かなスポーツ文化の振興及び国民のというところが一番大事だというふうに使われておりますので、私どもの理念もサッカーという言葉を使わないでスポーツという言葉を使

っていますが、スポーツ全体をクラブ、そしてJリーグが大きく変えるようなことができ、そして地域の振興につながればということですので、ですから各クラブが地域の活動を一生懸命やっているというのはこういう理念からあるというふうに思っていて結構だというふうに思っています。

会社の概要をご説明いたします。我々は株式会社です。ですから、成績が悪くなり、収入が減りますと経営破綻になります。そうならないためにもということで、今現在株主総会がありまして、株主は31社、地元を中心とする企業、マスコミが全社、テレビ局、ラジオを含めてですね、銀行さんも全社入っていただいております。代表、GMが統括をしまして、強化育成、トップチーム、アカデミーチームというのを持っています。このアカデミーチームの中学校、小学校は自前で持っていますが、サッカースクールをNPOをつくりまして、こちらで活動しています。市内の体育館あるいは県内の体育館等で選手みずからが指導させていただいているという状況でございます。そのほかマーケティング、セールス部、総務部という形で、これが会社の理念でございまして、会計参与という形で必ず会計事務所の方に財務のほうをチェックをいただいて、役員会にも出席をいただいて、収支のほうをきちっと把握をしている状況でございます。

続きまして、J3クラブの決算ということで、これは公表している資料でございますので、若干見にくいので、後ほど必要であれば正式なものをお持ちしたいというふうに思いますが、福島というのが今現在見ますと、収入は約3億6,000万円程度が今現在です。しかしながら、J3の平均がもう既に4億円を超えているという状況です。といいますのは、J2、上のカテゴリーから降格をして落ちてきているクラブがかなり多くなってきました。ということは、我々よりも大きいクラブがどんどん、どんどんJ3に落ちてきているということですので、ここからはい上がっていくというのは非常に難しい状況です。今J3が17チームございますが、これは前の年の決算ですので、そのうち3チームがトップチームがJ1にあって、J3チームを持っているチームですので、大きく言いますと14チームがJ3本来のチームとお考えいただいて、その中で昨年までは真ん中の7位だったのですが、収入総額からすると今9位という形になります。そうしますと、ここに営業収益ということで強化費、いわゆる選手の人件費というのが大体この収入の中で決まってきます。収入があればあるほど強化費に充てることができますので、いい選手を取得することができます。そういう意味では、なかなか地方クラブで勝っていくというのは収入に応じてある程度決まってしまうというのが正直なところだと思います。収入が多ければいい選手をとることができ、また勝つことができるというのが非常に大きく考えています。

ここで、当期利益としましては、昨年ベースはずっと黒字でうちのクラブは来ております。しかしながら、震災の年と途中であえて赤字にしてまた次にというふうにしたときもございまして、今現在債務超過にはなっていないという、財務の中ではJ3ではトップクラスというふうに言われています。しかしながら、資本金がうちは少ないので、今後何があるかわからない状況の中で、資本金をふやす、いわゆる株主構成をもっとふやすようにJリーグから指導されているというのが正直なところ

です。特にJ2チームであれば行政の方々も株主として一員になっているというのが非常に多くございます。今後はそういうことも必要かなというふうに思っています。

その中でクラブの理念の実現というのが非常に大きなものでございますが、まずは福島を元気に、子供たちに夢をとということで、この赤いところを徹底的に今クラブとしても充実させているというところでございますが、一番は福島の創造、福島プライドというところを育むという、これはトップチームだけではなくて、子供たちあるいは地域含めてというところを考えております。

先ほど申し上げた収入の面でいいますと、非常にサッカービジネスというのは難しい状況があります。数年前までは非常に赤字になって、経営破綻になってなくなりそうなクラブがたくさんありました。しかしながら、ライセンス制度が最近できて、3年連続赤字になりますとクラブにいれなくなりますので、収支が安定してきました。そこでもやはりお客様が望んでいるのは勝利、勝つことです。勝ちます。そうしますと、入場者ふえます。収入もふえます。強化費もふえて、チームがまたいい選手がとれるので、強くなっていくと。勝ちます、ふえます、ふえます、また勝ちますというこの勝利のスパイラルにいかにか持っていけるかというのがこのサッカービジネスの難しいところです。しかしながら、負けます、減ります、減ります、減ります、また負けますというこの負のスパイラルに陥らないようにすることが非常に難しい状況でございますが、何とかこちらのグッドという方向を目指していくということです。クラブが強化先行型というのはできません。ブラジル代表を呼んでこい、あるいは日本代表を何で呼んでこないのだとかいろんな方々に言われますけれども、実は収支とこの勝つというところのバランスというのが非常に難しい問題かなと思っております。

次に、これはJ2に昇格した一地方クラブの例です。2008年、2009年、2010年まではまだJFLというアマチュアのリーグで、J2に上がった途端に5億円以上になって、これは福島と同じような規模だと思いますが、しかしながらその後ずっと平行線の収支をたどります。横ばいの状態にだんだんなっていくというところです。これは分析をしますと、お客様が望んでいるのは勝利、強いチームなのですが、クラブとしては強化先行型の経営はできませんので、事業規模が大体まちの規模、人口ですとか企業数で固定化になってきます。統計的に言いますと、企業数の10%程度がスポンサーになっていただければかなりJリーグとしては大きなところだと言われておりますので、福島市の企業数からいうと約4,000かなというふうに把握をしています。その中で先ほどの450社が入っているということになりますと、大体もういっぱいいっぱいに来ている可能性があるということで、次は一つ広げた中でホームタウンの拡大というのも考えなければならない。

その中でどのような方法ではクラブがあつてよかったと言われるかというのが非常に大事で、ここからが地域の密着の活動という形になりますが、まずはホームゲームのときにハーフタイム等で地元の発表の場にさせていただいています。これはダンススクールですが、吹奏楽が来ていただいたり、よさこいのサークルあるいは大学のサークルが来ていただいて発表していただいています。また、さまざまなイベントで、親子との関係というのを非常に僕らは重要視してまして、母の日、父の日に

は、試合の直前ですが、サッカー教室でお父さんと子供たちが戯れる、あるいはカーネーションを子供に渡して、子供さんからお母さんにありがとうというようなきっかけづくりをさせていただいているというようなことも僕らは考えています。

特に子供たちの笑顔というのが非常に大事でございますので、アクアマリンのほうから移動水族館を呼んで来て、そこでホームゲームが家族みんなで楽しんでいただけるような形で露店が並び、今現在キッチンカーが15店舗ぐらい福島の我々のホームゲーム並びます。J3の中ではかなりスタジアム外で行うイベントとしては大きくなっているのではないかなというふうに思っています。

また、スポンサーへの恩返しということで、私も体を張ってダイドーブрендなんかにもなりながらスポンサーのPRをしたり、これは沖縄の会場ですが、福島県あるいは福島市の観光PRなんかもさせていただいて、昨年までは福島市の予算をいただいてPRなんかもさせていただき、温泉地のPR、ラジウム卵と一緒に飯坂温泉の皆様と持って行って長野の会場でPRをして、次お越しく下さいというPRをさせていただいたり、そういうところはやはり全国リーグだからこそできることかなというふうに思います。

スポンサーのPRということで、体験ブースということで、ワークショップを開催したり、企業さんのPRを我々の会場を使ってやっていただいている。子供に車であれば車とふれ合うきっかけをつくっているとか、そういう形でフードパークとあわせてこういうブースをつくっています。

また、場外イベントでございますが、これはちょうど春開幕したばかりですが、このような形でオープンに我々独自の椅子、テーブルを並べさせていただいて、店舗で買って試合前に楽しんでいただく、あるいはハーフタイムに楽しんでいただき、地元の方々にアーティストに来ていただいてコンサートをやっていたり、そこでこのようなマスコットとの写真撮影会とか、そういうことも我々のホームゲームでやらせていただいています。

特に健康づくりということで、震災の後子供たちの運動能力関係あるいは肥満が多くなったというところで、かなりサッカー教室を多く開催をさせていただいて呼んでいただいています。これは会津の奥のほうまで行ってまして、サッカー部がない学校を巡回していくとか、あるいはこのようにライオンズクラブとかロータリークラブで呼んでいただくというのもございますし、JA共済のほうと組んで、午前中は交通安全教室をやって、その後我々の選手がサッカーのふれあい教室をやるというようなコラボの催しなんかもやっています。

最近では、2年連続でございますが、わらじまつりにも参加をさせていただき、選手みずからが全員そろって踊ったり、あるいはブースを出したりということで、かなり市民に近い存在にならなければならないのではないかとということでクラブ一丸で取り組んでいるということもございます。また、福男福女という暁まいるのときも選手みずからが昨年走りまして、私もスタッフとして走りまわりましたが、そういうこともやっているという状況でございます。

ここからは、ではいかにこの地域にJクラブがもたらす効果があるかということなのですが、こ

れにつきましては、少し古いのですけれども、今もそんなに変わっているわけではありませんので、お配りしている附属資料の中にもあります。経済研究所がやっている2009年のデータというのが非常に面白い効果が出ています。中身に関しては、それぞれJ 1クラブから地域のクラブまで一つ一つ効果が記載になっていますので、こちらは、大変恐縮でございますが、時間の関係上、後ほど皆さんのほうで確認をいただきたいというふうに思います。

その中で愛媛FCというページがございます。ページ数でいいますと6ページです。横型のこのような形。これが今現在の多分J 3クラブの地方クラブの現状かなというふうに思っていますので、スタジアムもちょっと遠くて不便だとかありながらも、経済効果が約5億円程度で、雇用がどのぐらいというのはこのような形。現在J 3の福島ですと愛媛FCさんの当時のJ 2の入ったばかりのクラブと同じぐらいかなというふうにご理解いただければと思います。また、仙台ですとか、あるいは川崎フロンターレ、特に地方で頑張っているのはヴァンフォーレ甲府というところがございます。甲府につきましては、私どもの福島市と同じような人口でありますので、目指すべきはやはり甲府ですとか、あるいは松本山雅という非常にすばらしいチームがございますが、そちらのほう地域とともに歩んでいて、地域貢献活動も一緒にやっているというクラブでございますので、ご確認をいただければと思います。

その中で最終ページにこのようなことがございまして、Jクラブの活用戦略というのが非常に重要だというふうに言われております。これは、今市民、自治体、スポンサー、地域マスコミ、商店街含めて我々を使っていただくようなプロジェクトと一緒に考えましょう。特に仙台ではホームタウン協議会というのを独自につくっています。そこでどんな催しをまちと一緒に連携するかという活動もしておりますので、まだ福島のほうではそこまでいっていない状況でございます。やっとな商店街の方もフラッグを並べていただいたり、商工会議所のほうも応援していただいたりというのが始まっていますので、ぜひともこの辺を強く結びつけることができればもっともっと福島の活性化に寄与できるのではないかなというふうに考えていますので、私どもも一生懸命地域のために頑張りますので、皆さんとの連携というのを考えていければいいかなというふうに思っています。

ここから少しくラブの変遷のお話を申し上げます。なぜ私がこのクラブを引き受けることになったのかというところも踏まえてでございますが、震災から7年、このクラブは本当に幾多の困難を乗り越えて、皆さんにお世話になって今現在あります。多分震災がなければこのクラブはなかったと思います。そのぐらいのことでございますが、決して諦めないというところで地域リーグからJリーグまで上がってきたというところをお話を申し上げます。

新会社が設立をしたのは2011年の2月です。震災の1カ月前です。当時東北リーグであります。そこからさあ、頑張ろうというところで震災になり、選手、スタッフ含めて炊き出しやったり、福島から東北リーグで優勝し、全国16強という天皇杯でジャイアントキリングをなし遂げたこともございます。そこからJFL、アマチュア最高峰昇格をし、クラブで初めてというよりもJリーグで初めて湘

南ベルマーレという上のクラブとの提携を果たし、最終的にはJ3まで上り詰めた。この数年で地域リーグからプロまで上がってきたというのは私どもぐらいではないかなと思っています。そういう意味でいいますと、この流れからすると奇跡的です。ですから、我々が考えているよりもかなり速いスピードで上まで上がってきています。実はJ3というのはもともと設立というのは予定されていませんでした。J1、J2まででした。ところが、我々JFLに上がって、じっくり準備をしてJ2に上がろうと思っていたのですが、J3というのができるという形になって、震災の後その行動ですとか夢に向かってというのが非常に重要だなということで挑戦をしたということです。ですから、環境も含めてなかなかそろっていないというのが現状でございますので、ここから一つ一つ新たなプロクラブづくりをするべきではないかなというふうに思います。

この会社、昔は違う会社でございまして、FMのアナウンサーをしていた者が代表になって活動していました。しかしながら、非常に厳しい経営環境で、最終節、東北リーグに初優勝を目指して盛岡のほうにアウエーの会場に行きました。そこでチームが敗れました。緊急事態宣言というのをを出しまして、このクラブはあと数千万円足りないの、助けてください、そうしないと潰れますというのを出した直後に最後に敗れました。アウエーの会場、盛岡です。そのとき私はボランティアでこのクラブに携わってまして、アウエーの会場、盛岡で本当にすばらしい雰囲気、それにいわゆるのまれたのです。アウエーにのまれた。そこで思ったのは、やはりチームが負けたというよりも福島が負けたというふうに私は感じました。というのは、自分たちのまちのチームを応援する雰囲気というのがあちらは相当すごかったのです。

そこで、お金もない、非常に厳しいというところで解散するか、継続するかというふうになります。初めての契約更改。クラブというのは、2月の1日から1月の31日までがシーズンです。そうしますと、試合が終わるのが大体12月の頭で終わってしまいます。1月末まで何もなくても選手には給料払わなければならないという契約になります。そうしますと、新しい会社ができるかわからない。今までの会社がなくなるかもしれない。その中で選手を残すというのは非常にづらい状況で、初めて私が契約更改をやる形になります。いわゆる戦力外通告を出すというやってはならないこともやってきたわけでありまして。しかしながら、上から来たJリーグの選手は何でクラブの人間でないあなたに契約更改やらなければならないのだとか、そういうこともございました。そのときの元日本代表だった監督の思いを伝える役目として話をしました。クラブとしては、紙切れ1枚で戦力外を出すクラブもいっぱいあります。もうあしたから来なくていい、あるいは来年の契約ありません。でも、そうではなくてやはり対話で選手と話をしていくというのが僕は大事だと思っていましたので、決まるまで話をし続けました。そこが今選手と我々フロント陣のきずなになっていまして、今でも残っている選手が数名いますので、そういうところで非常にいい形になってきたのではないかなというふうに思っています。乗り越えるための使命感で動いていたというのが最初の話です。

そこで、法人を新しくしようということで、経済人5名集まりまして、新しい会社を設立し、これ

がAC福島ユナイテッドという会社名になります。設立の1カ月後に震災になって、本当にもう福島だめだという中で、みんなそれぞれ会社を持っていましたので、作業服を着て毎日毎日シミュレーションをしました。しかしながら、もうサッカーどころではないというようなところで、正直諦めかけ、スポンサーの解約、増資の取りやめが相次ぎ、監督契約の保留、そして選手の退団も相次いだというところがございます。またここで解散するか、あるいはトップチームを諦めて、休止をして、子供たちだけにするかという選択肢もございました。一時は活動休止ということで役員会で決議をした経緯がございます。非常に苦しいこの一、二年であります。

そこから、よくクラブチームはやりますが、避難所に対して選手みずからが炊き出しに行きます。そこで出会った、僕も一緒に行っていたときに出会った子供の涙というのが非常に大きくこのクラブを動かします。南相馬のほうで我々のスクールだった方が十六沼の体育館に避難してきて、私どもが炊き出しに行ったときに、ユナイテッドなくなってしまうのというふうに一言言われました。それは役員会でもうやめようというふうに決断した後でした。非常につらい言葉でした。涙ながらに。後で聞きますと、スクールをやっていた子だというふうに聞いたのですが、女の子です。そこからいろいろな方々にありがとう、あるいは今こそユナイテッド頑張れという言葉がどんどん、どんどんあって、そしてあづま陸上競技場脇にある体育館に避難している人たちのためにボールで遊ぼうという子供たちのいわゆる心のケアを始めた。そこからだんだん盛り上がってきて、どうしようかというところがありました。

しかしながら、お金がありません。幾らシミュレーションしても無理です。東北リーグが迫っています。条件は1つだけ。福島県では先ほど最初にお話をしました試合ができません。全てクローズでした。サッカーやってはだめというサッカー協会の方針。放射線の影響があるからということです。としますと、我々のホームゲームも全て県外で試合をしなければならないと。イコールお金がないのに全てホームゲーム県外って移動費もかかりますし、宿泊費もかかります。できるわけがないというところで、だんだん、だんだんもうやっぱり無理かなという形になります。しかしながら、JA全農さんが風評被害の払拭のために手を挙げていただきました。そこからいろいろな方々が頑張れという形になって、機運が高まってきました。

では、そこで誰がもう一回このクラブを導くのかという話になりまして、震災の直後に誰もが反対という中で私がやる形になりました。このころJヴィレッジがもうだめで、JFAアカデミーという育成プログラムも厳しい。なでしこという女子のチームがありましたけれども、このチームも消滅し、Jリーグを目指すクラブはもう福島県にはなくなるという状況がありまして、これは今だから、言えることですが、今現在の日本サッカー協会の田嶋幸三さんが私のところに訪ねてきてくれまして、何としても再生してほしいというお話を受けたということが大きな原動力になりまして、会社をやりながらも反対の声を押し切って代表就任という形になります。そこから私が戦力外を出した現役の選手、コーチにしていた者を現役復帰をさせ、監督を再契約をし、頑張ろうという形になったわけです。

そのときに真っ先に駆けつけてくれたのが湘南ベルマーレでありまして、これが震災直後十六沼公園でまだ炊き出しが行われているところです。この笑顔を見てしまったので、何とかやっぱり子供たちの夢、希望を見出せない状況の中で我々クラブが頑張らなければならないのかなという思いで今現在に至るというところでございます。

これが先ほどの震災の年、こういう思いが通じまして、クラブ一丸となって東北で初優勝する形になります。しかしながら、地域決勝大会、JFLというアマチュア最高峰に行く途中で敗れます。やはり福島で選手はできない、家族が反対をして戻らなければならない、いっぱいありました。お子さんができる方で、その実家のご家族から何で福島でプレーしなければならないのだ、戻ってきなさい。あるいは、やりたくてもできない。ですから、選手が集まりません。やめたばかりで23人しかいません。キーパーもけがをして、当時蓬萊中学校出身の元Jリーガーで時崎悠というのがいましたが、彼はフィールドプレーヤーだったのですけれども、キーパーがいなくなったので、やったことのない、みずからグローブをはめて、プライドを全て捨ててゴールキーパーをやります。周りからはばかではないか、どうしたというぐらい罵声が飛びました。でも、この自己犠牲というところがやはりチームに尽くす非常に大事な原動力になったというところですが、残念ながら、この試合勝たなかったのですけれども、敗れます。

そこから新たに、やはりトップ先行型で来ていたクラブです。前の会社から引き受けましたので。でも、先ほどの盛岡で感じたチームというよりは地域に必要とされるクラブにしなければだめではないかというところで監督交代する形になり、地元でわかっている時崎悠を、相当早かったのですが、監督就任をさせます。そこで震災を経験した選手と11名の覚悟を持って来てくれた選手が融合しまして活動をしていく形になります。

しかしながらまた、盛岡というのは我々の天敵でございまして、サッカーが合わないのです。また敗れます。そうしますと、人というのはやっぱり難しいもので、調子が悪くなると人のせいにし始めます。監督が若いので、監督が悪い、そこでもう練習なんかやってもしょうがない、何のために福島に来たのだという形でまたきずなが崩壊します。そこで、この監督は夜、グルージャ盛岡で敗れた後電話をよこして、私を切ってくださいという話をします。しかしながら、逃げるなという形でお話をし、チームが一つ一つもう一回存在意義というのを確かめ始めます。そこで、最終節、ずっと盛岡に負けていましたので、最後の最後グルージャ盛岡、ホームあづまというのが残っていたのです。そこで勝つことができれば可能性があるということでチームを一つにまとめました。

そういう思いがどんどん、どんどん伝わってきて、地域の方も動いていただいて、これはトランスパックさん提供ですが、ある日突然このバスがスタジアムにあらわれます。全て使ってくれと。全国でとことんJリーグまで行ってほしいという思いです。バス1台、そして運転手つき、全て無償です。そういうところがやはり選手に伝わって、感謝の気持ちになり、何とか福島のためにということになっていったので、先ほどの快進撃というのが生まれたのではないかなと。

これが2代目で、1代目は長崎まで走りましたので、大変な状況でくたびれまして、2代目はこのバスで今選手は移動しています。2階建てバス。J1でもこういうバス持っているところないです。ですから、いつも皆さんの思いに触れながら今の選手はやらせていただいているという感謝の気持ちを持っています。

ホーム最終節、おかげさまで震災2年目で逆転しました。このころは、平均入場者というよりは最多入場者3,400入りしました。ですから、上に上がれる、昇格をする、優勝する、そういう機運になると必ずまちの人というのは駆けつけてくれるというふうに思います。そこの雰囲気は僕らがこれからどれだけ出せるかというのも非常に大事かなというふうに思っています。

2年目、Jリーグ昇格ということで、合い言葉は福島の皆さんに元気をというところで話になりまして、天皇杯でもヴァンフォーレ甲府、当時のJ2の首位だったチームです。J1のアルビレックス新潟を破って16強と。それも地域リーグが16強ということで、天皇杯といえばユナイテッドというふうに言われた時期があったのですが、最近はいわきに敗れて大変皆さんにご心配をおかけしている状況でございますけれども、何とかまたこういう時代を取り戻したいなと思っておりますが、この右側のダイビングヘッドがこの年の最優秀ゴールに選ばれまして、国立競技場、今もう壊されて新しくなりますが、国立競技場の決勝戦、元旦のピッチで表彰式になりました。実は私はサッカーをずっと始めていまして、岡山小学校、三中、福島東ということで、なでしこの監督の高倉麻子は私の先輩です。小学校、中学校一緒です。そういう意味では何とか福島にという思いがあって、元旦はいつも小さいころ僕は国立競技場で元旦を迎えていました。そのときに広がっている光景、露店があって、ドキドキしながら入っていく、その後食事をして家族みんなで帰るとか、そんな文化ができればいいなと思っていたところでこのクラブを率いて、夢はかなうのだなと。選手ではなくても国立競技場のピッチで表彰式まで立つことができたということでございます。

快進撃、自分たちの存在意義が変わった、感謝の気持ち、そしてサッカー以前の選手、いわゆる社会人としての姿勢というのを非常に大事にしています。私がかかわったころは、Jリーグの上から来た選手は非常に鼻が高くて大変でした。それをいかに子供たちの憧れになるかというのを選手指導をかなりしっかりしています。これは監督も含めて。まだまだなところはありますけれども、だんだんよくなってきているのではないかなと思いますので、もし皆さんで素行が悪い選手がいましたらすぐ連絡をいただいて、僕がびしびしやってやろうかなというふうに思いますので、よろしく願いいたします。

ホームタウンの活動でございます。本当に福島市の皆様には大変お世話になって、最近では福島の水のPRということで、選手に練習場を含めて試合等にペットボトルを提供いただいて、これを全国の試合でも使わせていただいています。これは駅前にあるこういうバナーなんかも入れさせていただいて、選手みずからがCMに出てというところをPRをさせていただいているのもございます。その他福島市の、ちょうどこれからありますけれども、冠マッチ、スペシャルマッチなんかも開催を予定

しています。

また、会津で1試合だけやらせていただいている経過がございまして、会津若松市との提携も果たしました。1試合だけJFLから試合をさせていただいて、非常に盛り上がるものですから、会津の大会では負けたことがございません。不敗神話がずっと続いています。そういう意味では会津若松というのも非常に重要なところでございますので、これから福島市、会津若松市を中心に県内全域というふうに広げていく形になります。

オフィシャルクラブパートナー、これがオフィシャルクラブというふうについているいわゆる大口のパートナーさんと、あわせましてサポートコーポレーションという地元のお客様、例えば5万円、10万円とか、そういうところでご支援いただいているところもあり、うちわ、カレンダースポンサー含めると合計で450社という形になります。重複するところがございますので。マッチデープログラムということでこういう協賛をさせていただいたりしていますし、個人のサポータークラブというところで皆さんに本当にご支援をいただいているというところがございます。今オフィシャルが100社という形になります。

ボランティアというのも非常に重要で、今福島大学と福島学院の皆さんにお世話になって、ボランティアサークルキーズというものがございます。こちらのほうで試合と一緒に運営をしていただき、そこで試合が終わったら記念撮影をして、この日は多分、みんな笑顔なので、勝利をした日かなというふうに思いますが、この時間を共有してよかったなと思える瞬間というのを大事にしています。

これから福島市に野球、ソフトボールのオリンピックがやってまいります。そういう意味では、今まで大きな興行というのは福島市でスポーツありませんでした。東京マラソンとかも含めて、そういうのがありますと支えるという文化が必要なのですけれども、震災後、我々サッカーだけではなくて野球とバスケットもできましたので、福島県のプロスポーツというのは非常に今充実しています。しかしながら、震災を乗り越えたのは実は我々だけです。震災の後にこの2つはできています。社長も仲よくて、いつも3人でお酒を飲んだりしながら、連携をして、例えば福島市の体育館で試合をする、その隣でサッカーでシャトルバスを出す、あるいはあづまであれば前の日にナイターでホープスの試合をやって、その後バスケットをやって、その時間をずらしてサッカーをやろうと、そういう試みが一緒にできないかということは今模索をしています。プロスポーツというのは、自分でする、見る、そして支えるというところが非常に大事です。3要素です。する、見るまでは皆さん福島の方もやっていたのですが、この支えるというのは実は苦手というより経験したことがありません。これを我々プロクラブを通じてこれから皆さんと一緒に支えるという文化をつくっていければいいかなと思いますので、ぜひともボランティアの養成ですとか、いろんな形でホームゲームに参画をいただきまして、オリンピックに備えさせていただければなおいいものができるのではないかなというふうに思っています。これを我々だけではなくてこの3クラブが同時に同じようなことをやっているということを理解をいただきたいというふうに思います。

クラブとの提携です。Jリーグで初めてということで、湘南ベルマーレ今J1です。予算規模は約18億円というふうに言われています。我々は3億6,000万円です。このベルマーレであっても地方クラブで、神奈川県は横浜マリノスですとかさまざまなビッグクラブがあります。ジュビロ磐田は静岡ですけれども。その中ででは地方クラブ同士が提携することによって何がいいか。営業、事業面でスポンサーの紹介、グッズの委託をし、それを僕らが受けるですとか、スポンサーをそれぞれ紹介するですとか、企業同士が集まる交流会を両方の地区で開催をしてセッションをするとか、そういうこともやっています。

選手の強化に対しては、我々は大学リーグをスカウトします。ベルマーレは全体をスカウトします。その情報を持ってきて、ベルマーレ、J1では出れないけれども、数年たてば活躍するのではないかという選手を発掘し、そこに若い選手を福島ユナイテッドに入れて、成長して上に上がっていただく、いわゆるステップアップをするために我々を使っていただくということがあります。そうすると少ない人材の中で効果的にスカウトすることができます。ですから、ことし高校生を初めて2名取りました。京都の東山高校、あるいは早稲田大学の得点王の武颯という者がいますが、彼なんかはJ1からもオファーがあったのですけれども、今後のステップアップのために福島を選んでいただきました。若い選手が多いので、我々26歳以下が平均年齢になりました。そこでどんどん、どんどん活躍をして、次のステップになっていく、ベテランになってまた戻って来ていただくということができるのではないかというふうに思っています。

アカデミーに関しましても、うちのクラブは高校生チームがございませんので、中学生卒業していい選手は今まではベガルタ仙台やモンテディオ山形に行ってしまいました。人材流出です。本当は輩出しなければならないのが。それをベルマーレとの提携によってことし1名ベルマーレに昇格をして、今度ベルマーレのトップに上がるかもしれません。福島市の出身です。必ずベテランになって福島に恩返しをしたいと戻って来てくれるのではないかなと思っています。そんなことを高校生チームができる前までは提携を進めて、選手や、そしてスタッフの育成、今うちの常勤常務にベルマーレの運営の責任者が常務で来ています。役員も出してもらっています。我々のスタッフも今アカデミースタッフがベルマーレのスタッフとして活躍しています。そういうような連携をして、切磋琢磨しながらというところで、それをベルマーレのJ1のホームゲームで福島の商品を売ったりとか、PRをしたりというところで観光や復興の支援に結びつけばというところがお互いのクラブで。もともとベルマーレの会長というのがJリーグに上がった当時、中田さんがいたころですね、に急に社長に就任した経歴があって、全く私と同じような境遇だったものですから、意気投合の中でこの締結があるということでございます。

ここから後半でございますが、ではどのような形で今後の目標、そして地域の活性化につなげていくかというのが非常に大事になってきます。私どもの目指すチーム像、そして理想的な関係性並びに今後の事業展開というところをお示しをしたいというふうに思っています。

まずは、クラブの現在の状況を整理をいたしました。地域リーグからJ3に駆け上がってきました。当初私がこのクラブを率いたときには、売上高は7,000万円ぐらいでした。本当に弱小です。今現在3億6,000万円ということで、5倍以上という形になってはいますが、ここでやはりJ2に上がるためには4億円、5億円というのが必要になってくるという形になります。

昨年の状況から見ますと、スポンサー収入は微増で少しずつふえています。先ほどの決算は3億6,000万円なのですが、こっちは3億8,000万円ぐらいいくのではないかなと思っています。そうしますと微増です。ファンクラブに関しては、だんだんもうなれてきましたので、少しずつ下がっています。団体で申し込んでいるお客様が多かったのですが、それが絞られてきたということで下がっています。ホームゲームの集客ということで、これはその年によって違います。少しずつ微増なのですが、しかしながら悪天候が昨年多くて、どうしても試合会場が屋根がないものですから、雨が降ってしまうと遠いあづままでは行きづらいということで下がっています。ここは非常に重要なところかなと思います。台風も非常に多いので、これから心配をしています。アカデミーは県内最強です。全国大会にも出たこともございます。

地元のスポンサーは、なかなか増額というのは難しい状況になってきました。震災の特需で建設会社というのは非常にいい形でしたので、スポンサーやっていたいていただけでしたが、なかなかもう除染も終わりつつありますので、厳しくなってきていますので、多分増額というのは難しいのではないかなと。そうすると、ふやす、あるいは大きな企業さんを見つけるというのが非常に大事になるというふうに思います。

練習環境、十六沼中心に優先で使わせていただいています。しかしながら、いろんな地域クラブの方々あるいは生涯スポーツがありますので、優先も60%になっています。今でも、相馬の光陽のサッカー場や米沢のサッカー場がありますので、そこを使わせていただいて、ジブシーが実は続いております。そこでも何とかスポーツ振興公社のほうで非常に頑張らせていただいて、今信夫ヶ丘の陸上競技場の芝生を使わせていただいたり、部分、部分で芝生のあるところを探していただいてご提供いただいたりしています。かつこっちは非常に暑くて大変な状況なので、普通午前中練習なのですけれども、それを早く会場をあけていただいて、朝から練習をさせていただいていますので、公社の皆さんには本当にありがたい一言です。そういうところが少しずつチームの結果につながっていくのではないかなというふうに思っています。

また、アカデミーでございますが、トップチームは優先で減免をいただいていますけれども、一クラブの少年チームということで、まだまだ抽せんで、一般のところと同じです。ということは、先ほどのピラミッドの中でアカデミー育成部分を充実することが次につながっていきますので、いかにこのアカデミーの練習環境を整えるかということが大事なところで、それをこのたびの十六沼の増設あるいは人工芝もう一枚ふやす、あるいは民間で1面確保する等を総体的に考えている状況でございます。

クラブの体制、先ほどJリーグから、ベルマーレからお越しいただいている方で、Jリーグも何とか福島頑張れというふうにエールをいただいて、Jリーグからも1人今派遣で来ていただいています。

そんな中でこれらの状況を踏まえてクラブの方向性を本当に考える時期になっているのかなというのが今現在の状況の整理です。

ライセンスというのは先ほどお話ししたとおりでございますが、大事なところだけ皆さんと共有させていただきたいのです。J2に上がるためには、J2基準のスタジアムというのが必要になります。今現在J3はあづまだけがライセンスとれています。県内にはJ2がとれるライセンスはありません。競技場がありません。Jヴィレッジのスタジアムもだめです。そうなりますと、何がだめなのだといいところで、照明がないのです。国体のメイン会場照明ないのは福島だけだと思います。そういう意味でJ3ライセンスも2022年の6月までに照明を設置しないと僕はJリーグから剥奪されます。これは本当の話です。これを発表していいものかどうかというのは実は水面下で非常に悩んでいる状況なのですが、一部の皆さんとは共有をさせていただいています。ここを今使っているのはあづまで県営施設ですので、県の皆様あるいは今後も含めて、多分スタジアム議論が最近なっているというふうにご理解いただきたいと思います。ですから、J2だけではなくてJ3も照明がないとだめ。というのは、38度、36度の中での夏場の開催というのは、我々だけではなくて観客のお客様に非常に負担がかかって、熱中症で大変なことになるところになります。ですから、ここが非常に大事になってきて、ナイターで試合することができないというところがあります。専用練習場、十六沼確定になりましたので、できれば人工芝1面を我々優先で使わせていただければ幸いかなというふうに思っています。

ユースチームをつくる、3,000名というのは努力をしていきたいと思えますし、ことし2,000名を何とか達成して次につなげていこうかなと。その間に昇格の機運が高まり、ことしいい成績になったらまたふえていくのではないかなというふうに思っています。

これらを解決するのは戦略ということで、クラブ独自、これほどこにも出ていません。機密でお願いできればと思いますが、強化と業務計画、そして資金計画のこの3本柱がセットで動かないとならないというところで、ツープラスツーの中期計画です。この間に揺るぎない、鹿島アントラーズのようなクラブスピリットというのをつくっていくというところの中で、トップチームとしましてはやはりライセンスを目的とします。なぜではJ2を目指すのかというところなのですが、2週間に1回、J2になりますと平均入場者が7,000名から1万名になります。アウエーのサポーターが、例えばJ2に上がりますと、隣に新潟があり、山形があり、多くのサポーターが試合のために福島を訪れます。あるいは、浦和レッズあるいはガンバ大阪がJ2に落ちます。僕らがJ2に上がります。そうすると、ガンバ大阪のファンがどっと来ます。そうしますと、周りに宿泊をしていただいたり、あるいは食事をしていただいたりという形で温泉街の宿泊というのも非常に多く考えられると思っています。そういう意味では、1つ上がることによって地域の活性化に直結してくるという形になります。20試合ぐ

らいJ2はありますので、2週間に1回1万人のお客様が20回定期的にやってくるという形になります。そういうことでまちの活性化に必ず寄与できるのではないかなという思いで活動しています。そのほか育成年代のものですとか、将来的にユースチームとかというのは今後の活動にしています。

業務計画として、できれば人工芝1面を専有化させていただきたいという思いと天然芝について、今後の話ではございますが、興行という面ではいろんなイベントも張ることができます。ここ数日前、福島市の委託をいただきましてユナイテッドカップというのを開催をさせていただきました。飯坂温泉に子供たちのチームが泊まっていたいて、そこで試合をして交流を図るというものです。そうすると、今スポーツ合宿というのは非常に多くお金が落ちます。そういう面でも飯坂温泉、そして土湯温泉の活性化にも寄与できるのではないかな。これに成功しているのが和倉温泉です。聞くところによりますと、議員の皆さんも視察をされたというふうには伺っていますが、サッカーピッチができて、それで非常にいい関係で、大学との提携を果たし、常時合宿できます。プラステニスコートも20面今度設置をし、そこに対しての合宿にも来ます。そこで観光でシーズンオフのときにいかに来ていただくかというのを考えることができるのではないかなと思っています。また、クラブハウスというのもこれから必要になってくるというところがございます。スタジアムは先ほど申し上げたとおりでございますし、2022年というところと、2023年の女子のワールドカップが日本にやってくる予定です。そのときにスタジアムがあれば日本サッカー協会は福島でやりたいというふうに言っています。しかしながら、スタジアムがないので、それをどうするかという形になりますが、高倉麻子さんが監督のうちにこれが決まればかなりの確率でやってくると思います。そうすると非常におもしろいかなという、これは夢でございます。

資金計画、できれば5億円を目指すということで、安定した順位になって、昇降格がない形でチームを運営していきたい。既存スポンサーの増収、そして新規スポンサー。今私は東京に通いながら東京に在住の福島県ゆかりの社長を訪ね歩いています。そういうところでお願いをしているというところ。集客の強化、まずは2,000名入れるというところとホームタウンを大きくしていく。最終的には株主総会で増資をし、潤沢な形で上を目指していければいいかなと思っています。あとは、強化費のことについてはそれぞれクラブで考えているところです。

十六沼も先ほどお話しした流れですので、完成すれば多分こんなような形になって、いろんなフェスティバルができて、合宿のメッカになるのではないかなという思いでございます。

スタジアムですが、今スタジアム議論が出ていますので、詳しくは申し上げません。ただ、やっぱりあづましか会場がありませんので、今現在照明がないのです。メインスタンドしかありません。6,500しか入らないので、J2基準は1万席が必要というふうに言われています。これを改修するとバックスタンドをつくって、照明をつくってという形で、オーロラビジョンだけは陸上日本選手権で設置しましたので、J1級というふうに言われています。しかしながら、ここが工事に入りますと、ほかの代替のスタジアムが福島ありませんので、工事中使用ができないという形になってきますので、

何とかまちの活性化につながるようなスタジアムができないかということで、商工会議所を中心に福島市にサッカースタジアムをつくる会というのが設立になったというのはこういう経緯がございます。

今全国ではスタジアム建設が過熱しています。長野できました。大阪できました。北九州もできました。京都も今着工しました。隣の栃木も着工して完成間際です。そのほか山形も新しいスタジアムを天童ではなくてまちの真ん中につくりたいという構想で今動いているというのが現状です。中心市街地を活性化というところで今スタジアムの建設が過熱していると。

これがスタジアムをつくる会で長野完成して見に行きました。北九州も行きました。吹田というガンバのスタジアムも見に行きました。1万5,000、1万5,000、ガンバはJ1級で国際試合なので、4万ぐらい入るのですけれども、そういうようなコンパクトで活性化につながるものができればいいなという思いでございます。

スタジアムといえばやっぱりヨーロッパがメインになりますので、私はプロクラブの環境、アマチュアクラブ、そしてスポーツ行政、行政でもスポーツに力を入れている都市がいっぱいあります。ベンチマークにするクラブというのを視察をして欧州に飛びまして、これはアヤックスというオランダで一番名門のところなのですが、J2に上がったときにアヤックスとのチーム試合ができればいいねなんていう話をしながら、今非常に育成に力を入れているクラブでございます。

ブンデスリーガの宝石というドイツリーグの16万人の都市の中に3万人のスタジアムがある、そういうところがある。これはホテルが併設になっていまして、ホテルから見た会場がこんな感じ。ホテルで会議で商談をすると大体100%成立するというふうに言われています。高揚するということだと思いますが。福島は、そういうところではなくてもこのぐらいの大体1万人ぐらいの非常にコンパクトなスタジアムなんかもいいのではないかな。複合型で、ここはホテルとカジノと市民センターとレストランとかいっぱい入っていて、周りは公共施設のようなのですけれども、中に一步踏み入るとスタジアムになるという形になっています。

また、いろんな視察をしますと、ユニット型でつくっている仮設的なスタジアムもいっぱい欧州にはあって、安くつくるためには、普通は1席50万円と言われていています。ということは、1万席つくと50億円かかるというふうに言われています。これが1万5,000ですと75億円かかると言われていたのですが、この仕組みですと、鉄骨造でつくと1万席で30億円超ぐらいでつくることもできるというスタジアムもあります。今回ラグビーの世界カップを開催する釜石はこの仕組みを使います。そういう意味で多くの世界カップのときは仮設でつくって、常時はそれを解体をして常設に戻すとか、いろんなやり方があるというふうに言われていますので、こんな仕組みもぜひとも機会がございましたら資料等をお持ちすることができる形になります。本来ですといろんな複合型でつくっていくというのが非常に大事なのですが、いよいよというときはこういうこともありますよというのをご理解いただきたいというふうに思っています。非常にいい形で、観戦するためには本当にコンパクトでいいのです。Jリーグは今1万とか1万5,000と言っていますけれども、では本当にそれが必要なのか

という議論を今実行委員会で僕はしています。いろんな地方クラブ、これから目指すクラブも含めて、5,000名、7,000名でもいつもいっぱいだったら最高ではないですか、地方で。そういうところを今説いていますので、もしかすると数年で上に上がることができる。順位さえ伴えば上に上がることができる。しかしながら、数年後にそういう整備をしてくださいというふうになる可能性も今含まれていません。そのときに照明がないというのは、もうそこで最初からだめという形になってしまいそうだなというのが懸念があります。

僕らが一番目指したいのは、実はトップチームとかアカデミーチームというよりもこのクラブです。アマチュアクラブなのですけれども、デュッセルドルフにありまして、地域クラブが人格形成に非常に不可欠だということをオーナーは説いています。アマチュアですが、グラウンドが2面あって、そこにアリーナがあり、クラブハウスも持っていて、僕らよりも環境がすばらしく、Jリーグのクラブよりも、アマチュアですけれども、すばらしいまちのクラブです。バドミントンクラブもあり、スイミングもやっていて、いろんなクラブがこのクラブのエンブレムで違うスポーツをやっていると。そこでレストラン、バーがあって、クラブハウスがありますので、一般の方も利用して、子供たちからお年寄りまで、子供たちそこで勉強したり、クラブスタッフがみんなで見守りをするというのが居場所です。最近部活動、特に中学校なんかは昔は夜遅くまでやっていましたけれども、なかなかもうそういう状況ではなくなってきて、地域クラブに頼るようになってきました。できればそういう人格形成に僕らのクラブがなればいいなというふうに今思っています。この代表が言っているのは、そこでみんなの目で見るので、いじめが少なくなったとか、あるいは目上の人とかお父さん、お母さんではない、肉親ではないけれども、クラブの全体が共有してその子たちを成長させてやるというところをやっている。その資金としては地域の方々にお世話になりながらというところで、たまにバドミントン代表が出たり、あるいはサッカー代表が出たりという地域の誇りになっていくというふうにおっしゃっていました。

私たちが新しい会社名でなぜACとつけたというのは、AC福島ユナイテッドというのかというのは、アスレチッククラブのACという実は意味です。そういう意味では、総合型スポーツクラブ、アルビレックス新潟とか湘南とかがあります。サイクリングクラブを持っていたり、ビーチバレーのクラブを持っていたり、フットサルを持っていたり、それが一つのエンブレムとしてやっています。できれば私たちもそのような形で生涯スポーツをやれるようになればいいなというふうに思っています。今サッカーを応援するのが精いっぱいではありますけれども、もともとは昔国体のチームであった銀行さんがやっていたビーチパワーズとか、福島銀行のバレーボールチームがあったのですが、あそこですとか、ピンクパンサーズもうちと一緒にやっていたころも実はあったのです。それがなくなってしまったのです。どうしても企業の理念で事情からするとスポーツクラブを運営するというのは大変になってくるので、できればそういう独立採算制にして頑張る環境を整えるというのは我々AC福島ユナイテッドの将来的なあり方だというふうに今思っています。

ここからが福島市との連携の、これはあくまでも案でございますが、お話を申し上げます。1から5まであります。まずは、小中学校への訪問ということで、今までは授業にお邪魔する、そしてお話を、プロの選手の話を書く、体験談を書く、単発ではやっていますけれども、定期的にやっているとすることはまだありません。給食と一緒に食べたり、あるいは食事について語ったり、部活動を巡回して指導させていただくということもできればいいというふうに思っています、クラブ全体含めて。身近にプロ選手がいて、憧れになって、笑顔づくりができれば最高かなど。ほかのJリーグのクラブというのは、市との連携、教育委員会さんとも話をしてこういうことをやっています。非常に人気があるコースだと思います。選手が練習終わって給食に駆けつけるなり、あるいは控えの選手が行ったりというところで活性化になればいいかな。そこで食事の話で、選手って食事が第一で、最近強くなっているのは昼の御飯もクラブで出すようにしたからです。朝飯は、飯坂に寮がありますので、寮生は飯坂温泉の大きな旅館に提供いただいて、みんなでバイキングを食べさせていただいています。練習前にみんな10人ぐらい旅館さんをこの週は大鳥さん、この週は吉川屋さんあるいは聚楽さんということで提供いただいています。昼は、練習終わって、1旅館をお借りしまして、そこで我々の専属シェフが行って料理をつくって提供する。そういうところで少しずつ体が変わってきて、トレーニングが変わり、今現在非常に強くなってきたというのが正直なところ。そんなことも子供たちに伝えることができれば幸いです。

次に、地域の指導者の育成です。これは、ボランティアで指導している方がたくさんいます、手弁当。しかしながら、知識があつてというわけではない。昔やっていたとか、いろんなことがございます。そういうところへ安全ですとか健康増進ですとか、地域全体のレベルアップをするというのが非常に大事で、高校サッカーも昔は福島東とかが3連覇したり、全国大会でベスト8で、萬代選手がいたころですが、なったりしましたね。その後続きません、なかなか。尚志高校という郡山の高校が今集中で頑張ってくれています。全国レベルです。しかしながら、県内全域のレベルが上がらないので、幾ら頑張ってもやっぱり上では勝てないです。はっきり申し上げますが、聖光学院非常に野球頑張っています。相当すごいです。でも、全体のレベルが上がらないと多分聖光さんも全国優勝できないのではないかとこのように斎藤監督とは私は私をしています。そういう役目がやっぱりプロクラブの役割で、ボランティアの指導者を指導していくというのも非常に大事なかなと思います。

福島市の観光PR、これは全国リーグを生かして今現在もやっていますので、これをどんどん、どんどん充実して、観光と温泉地と、あるいは企業PRなんかも含めながらコラボレーションして、スポーツの合宿のメッカにできればいいかなというふうに思っています。Jヴィレッジが先日再オープンをしました。これがなくなっていたころは、グラウンドがなくて松島のフットボールセンター、数面しかありませんけれども、そこがいっぱいでした。合宿するところがないからです。Jヴィレッジできました。しかしながら、交通の面はまだです。ここは、中通りに新幹線で東京から1時間半の部分にこういうものができれば、かなり今いろんなクラブから問い合わせもあります。福島で

合宿やりたい、でも場所がないというところです。ですから、非常に天然芝が2面できるということになりますので、Jクラブも多分合宿に来てくれるのではないかなというふうに期待をしています。

4番目、やはり産業、物産をということで、コラボレーションを今しています。うちは風評被害の払拭をいろいろなことやっていますので、後ほど詳しく話をしたいというふうに思っています。

プラスホームタウン拡大ということで、今福島市を中心なのですが、拡大を考えています。特に中核市になっていただきましたので、ここで県北地区を中心に拡大をし、29万から40万というところの中で企業数もふやしていくことができればJ2でやることができるというふうに思っています。にぎわいという部分をいかに連携をしてやっていくか。ここで周りの市町村と一緒にホームタウン協議会なんかを立ち上げて、いかに当市のまちづくり、イベントと組み合わせて我々が生きることができるかということが非常に重要なことというふうに思っています。

先日は、もう実施しましたけれども、国見、川俣、伊達、桑折までは市町村デーが終わりました。多くの方が来ていただいています。川俣町長も来ていただいています。あと、今度の日曜日本宮市の市民デーです。無料招待いたします。16日は初めて郡山に行きます。福島のサッカーというのは実は郡山がメインで、サッカー協会の本部も郡山なのです。でも、3クラブぐらいなくなってしまったので、サッカーだけはだめだというかなり厳しいトラウマが今でもあります。営業に行くと大変です。でも、郡山の皆さんに一度はお越しいただきたいということと、郡山で1試合やるのであれば会津のような形で連携ができるのではないかなと思っています。福島と郡山というところで、全国リーグで体験したのは、博多に福岡のチームがあります。これがJ2です。北九州に、小倉に北九州J3のチームがあります。博多と小倉間が新幹線が割引になっているのです。そこで飲みにしゅっちゅう行ったり来たりできるのです。そうすると、福島市民だけが福島の飲み屋さんで飲むのではなくて、郡山の人に来ていただいたらどンドンふえていくのではないかな、あるいは福島の間が郡山に行ったら新しいお客さんがいるのではないかなというのも体験しています。今非常に博多小倉間の行き来というのが活発になっています。そんなことももしかするとスポーツであれば福島、郡山というのもつなぐことができるのではないかなというふうに、勝手な願いではございますが、思っています。

戻りますが、二本松、大玉というのもこれから開催の予定でございます。この郡山やる9月の16日は、元日本代表のJリーグのレジェンドの方がお越しいただいたり、あるいはアーティストのGLAYのTERUさんもお越しいただいてやる大きなイベントで、4,000名から5,000名ぐらい入るのではないかなというふうに思っていますので、ぜひとも皆様方もお越しいただければ非常にありがたいと思います。これが会津デーもやりました。会津は多くの、会津若松市だけではなくて全ての方々にお声がけをしました。郡山もやります。そんな形で入場料もそうですけれども、料金だけではなくて入場者の増加にもつなげていければいいかなと思っています。

最後に、風評被害でございますが、日本財団のほうから表彰をいただきました。Jクラブでこういうことをやるのは珍しい状況で、Jリーグの中でも農業といえば福島ユナイテッドというぐらいに今

なっています。といいますのは、我々フットボールとか、スタジアムとか、エンターテインメントやっていますが、このPRと払拭活動というのが非常に重要だというふうに思っています。それが地域から必要とされるクラブだと思いますし、農業も含めて成長する形になるのではないかなというふうに思うからです。

まずは福島県の委託をいただき、福島市の委託もいただいて、昨年までこのようなアウエーの会場でPRをさせていただいたものです。ふくしまマルシェということで、6次化商品を福島県の全域の農家さんと提携をしまして仕入れます。農家さんから全量買い取りです。戻しません。売り尽くします。我々のホームゲーム、アウエーゲームあるいは提携しているベルマーレのJ1のホームゲーム、すごい購買力です。そこで福島のことをPRをして使っています。ジュースだったり、野菜だったりというところ。これが栃木で試合の会場ですが、ミスピーチにも来ていただいて一緒に行動し、PRをすとか、野菜関係も販売をしというところで、これは川崎フロンターレと湘南の試合にマルシェを出しますと非常に売れ行きがいい。そこで福島のものを買っていただいて、その後お取り寄せをしていただくとか、そういう形ができればいいかなというふうに思います。

今農家さんとは石川町から福島市含めてこの農園さんと提携をし、ジャンボなめこですとか、いろんなものを仕入れています。食べ方までスタッフは買っていただく方にお教えしたりしています。試食会なんかもやっているというところで、福島市は今佐藤農園さんと阿部農園さんでもやっていますし、古山さんとたなつものさんという形です。

選手みずからが受粉、摘果作業、収穫をし、苗木オーナー制度を使ってやっています。クラブが買い取って、それを全国で販売し、先日いちいさんでも福島のももを、クラブが育てたももをやっているということです。

これはももの状況です。選手がやっているというのは珍しいと思います。監督も汗を垂らしながら。

昨日は、ふくしまピーチマッチというタイにもものPRに行っていました。全農さんにお世話になりながら、福島県の事業として百貨店でもものPRを選手がみずからし、試食会を行い、販売をしました。非常に売れ行きよかったです。タイではももがとれませんので、福島の高級品というのは非常に好まれます。貧富の差が激しくて、一流の百貨店に政府の方が訪れて、福島のももということで食べていただきました。相手のチームとの、地元のチームとの交流戦をやって、その入場者1,000名にも1個ずつプレゼントをしたというところで、これからももの出荷が進んでいくのではないかなと思っています。ですから、スポーツという部分で世界共通のサッカーというのを使って活性化できるというのも非常に重要ですし、福島県人会との交流会なんかもさせていただきましたので、非常に重要な。

僕らシーズン中、アウエーに行きますと、アウエーの会場で今でも避難している家族が訪れてくれます。沖縄に行くと、沖縄のところに受け入れている家族と一緒に来て、今福島どうというふうに聞きに来るのです。そうすると、そこで大分もう回復して全く問題ないですよ、ではいつか戻りたいね

なんていう、そういうきずなのコミュニケーションなんかも僕らの役目かなというふうに思います。

いつの日かJ 1、そして天皇杯を福島へ持ってきたいというふうに思っています。世界の福島というところで常時1万人の集客ができれば、非常に交流人口が上がって活性化につながるのではないかなと思っています。何とか地域の活性化というのをこれから経済効果も出しながら活動していきたいというふうに思っています。

こんな話をすると、またほかではないかというふうに言われて、福島の人たちからすると大変な形に思えるかもしれませんが、でもサッカーというのは非常におもしろいもので、レスターという岡崎選手が活躍しているクラブがあります。ここのレスター市というのは、初優勝しまして非常に盛り上がりました。132年目の奇跡というふうに言われていますが、福島市と同じ人口です。29万人です。その中で絶対あり得ないというものが、本当にいい形であり得ないものが優勝し、歓喜に沸いたというのがサッカー界でありますので、ぜひとも夢を大きく持って一緒にクラブづくりをしていただいて、私どもを使っただいて、何とか皆さんのお役に立てれば幸いかなというふうに思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。

以上でございますが、何とかこの夢に向かってというところを現実にしていきたいと思っておりますので、皆様方のご指導を賜れば幸いかなというふうに思っています。

少し早い時間ではございますが、私の話はこのぐらいにさせていただきます、ご質問にお答えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。お世話になりました。

(石原洋三郎委員長) 以上で意見の開陳は終わりました。誠にありがとうございます。

次に、質疑を行います。

ご質疑のある方はお述べください。

(後藤善次委員) どうもありがとうございました。47ページ、湘南ベルマーレとの連携の件で、営業、事業の項目の中にスポンサーの方たちの交流があるというお話をいただきました。例えばどんなようなことをして、今後それもどのような形になっていくのか、方向性なんかもあればちょっとお聞きしたかったですけれども。

(鈴木勇人参考人) 具体的な話を申し上げますと、我々の試合とあわせてその前日に実は湘南ベルマーレでも1試合我々のホームゲームをやります。その前に企業の方にお越しただいて交渉をかけます。ホテルに集まっただいて、そこで名刺交換等交流をしていただき、あちらのバス会社さんと福島のバス会社さんがお会いし、そこでいろんな商談なりなんなりと連携をするというのが始まっています。また、建築の建材メーカーさんをご紹介いただき、ベルマーレのブランドをつくって、例えば断熱材をつくるので、では福島も一緒にエンブレムが入った断熱材をつくりましょうとか、そういう価値です。お互いスポンサーになっていただいて、それを両方とも応援していますよというのもあり得るでしょうし、あるいは具体的に言いますと、いもくり佐太郎さんという、名称を出して申しわけございませんが、ダイオーさんは今我々のホームゲーム会場でいもくり佐太郎のユナイテッドバ

ージョンというのを我々のユニホームを着た袋で発売をしています。これをベルマーレのほうで福島の商品をユニホームを着せて発売することができないかとか、そうすると販促的に非常に、全国ですので、盛り上がってくると。福島だけで捉えるのではなくて、J1のメリットを使ったものというのが福島の企業の皆さんからすると非常にメリットになると思います。あるいは、あちらの湘南、いわゆる中央圏にいる企業さんは地方に進出するきっかけを望んでいます。そのために我々ユナイテッドにまずスポンサーになっていただいて、そこから企業の紹介とかというのもございます。

ここで一つの例は、人材の評価システムをやっている会社さんがこのクラブの提携で成功しまして、あしたのチームという人材評価をする仕組みの会社さんがあります。これを私どものクラブで採用し、そのシステムを福島の企業の皆さんにもPRをさせていただいています。人材評価システムというのは各会社さんそれぞれあるのですけれども、なかなか合ったものというのがなく、独自にやられている会社さんが多いので、我々クラブと一緒にPRをさせていただいて、そのよさをお伝えし、そこで企業の人材評価に結びつけていただくとか、さまざまなことがございます。具体的な例を言うと今そのようなことで、湘南ベルマーレの近くで1回、あとは福島市で1回という年2回ほどそういうスポンサーの特権といいますか、そういう交流会を開かせていただいています。

(斎藤正臣委員) ご丁寧にありがとうございました。ユースチームについてお伺いしたいのですけれども、高校生の年代の方のユースチームの設立というものが急務だというようなお話がありましたが、そのチームが設立するというか、運営できるようになるために必要なものというのはやはり練習環境というもの、いろいろご協議されているというお話でしたけれども、練習環境というのはやっぱり大きなウェートを占めるのですか。

(鈴木勇人参考人) そうですね。やはりユースというのは実はお金を生み出す場所ではないのです。先行投資です、アカデミーは。そうしますと、その部分のところをどうするかという形になりますので、きちっとした練習環境やそのほか含めた学習システムと一緒に動かす必要があります。まずは練習環境なので、これは自前で持つか持たないかというのはまた別な話で、ある高校さんと提携するのか、あるいはどこの高校に行ってもクラブの練習のときに駆けつけてもらってやるのかという2つの方法があります。その中ででは高校さんとやるといっても、県立高校ですとなかなか難しい問題がありますので、私立になってしまいます。そうすると、絞られてしまう。そうすると、では周りの地域の目としてどうなのかとか、いろんな問題があるのではないかなというふうに思っています。その中でサッカー協会と今話をしているのは、ユースをつくっていい選手ばかりがそこに行ってしまうと、周りの高校さんがまた選手を、言い方悪いですが、持っていかれたみたいな形になりますので、それは避けなければならないというところで、それぞれやっているけれども、その中のトップトップがユースに入り、ユースに入れなかった子正直出てきますので、そういう子が地域の高校で活躍をする、お互い連携がとれれば一番いいねというふうには言っています。

しかしながら、今日本のサッカー界でユース大会というのがあります。そうすると、出てくるのが、

高校サッカーは高校サッカーで別大会ですので、ほとんどJリーグの下部組織のクラブが今主流になっています。Jリーガーになるのもなかなかやっぱり高校、大学というのは相当難しい感じになっていまして、うちにことし来ていただいた若手選手はみんなFC東京ユース、マリノスユースとかという選手が多いです。かつライセンスも必要になってきますので、いつかはつくりないと上に上がれないという状況ですので、福島のユースのつくり方というのは非常に難しいですので、慎重に、かつ協議をしながらつくるべき問題かなと思います。ましてや周りにユースチームがありません。高校生チームしかありませんので、そうするとベガルタ仙台、モンテディオ山形等しか周りにはないので、その中でやっていけるかというのも正直クラブ運営としては非常に負担が大きいところになりますので、今現在はトップに特化してというところですが、でも、アカデミーをつくるためにはやっぱりメインの会場があって、そこで子供から大人までやれる環境があって初めて育成型のクラブになるかなというふうには思います。

(山岸 清委員) 2点お伺いします。ありがとうございました。

このホームスタジアムは、J3ライセンスが大体取れるくらいになってきているから、急がなくてはならないということなのですかという点が1つと、あと私一番考えたのは選手の人、これ野球だとノンプロってあるのだけれども、きょうのご説明あるいはいろいろ見ると、ほとんどユナイテッドFCの選手はプロなのだよ。たしかプロ契約なのだよ。

(鈴木勇人参考人) そうです。

(山岸 清委員) そうすると、一生懸命一流の選手になるのにそれこそ中学、高校から専門で一生懸命やって、そしてそれでもなかなか難しい世界だろうと思うのだけれども、例えばなってだんだんうまく、どんどん調子よくて、J2、J1になって、あとは海外から引き抜きに来て、あの引き抜き金額聞いたらびっくりする。俺もサッカーやっていたほうがよかったのではないかな。100億円とかとんでもない金額だものね、あれ。だから、そういうふうになれる人はいいのだけれども、なれない場合、例えばけがしたりとか、あるいは途中でちょっとあれになったり、そうするとその選手の実家が農家で、30歳でやめるから、ちょうどいいあんばいだから、早く帰ってこいというあれならいいのだけれども、そうでない場合、途中で、例えばさっき代表も契約解除みたいなつらい経験なさったの聞いて、これは大変なお仕事だったなと思うのだけれども、そうなった場合のその選手の受け皿というのかな、そういうのはどう。というのは、ピンクパンサーなんか東邦銀行もやったり、ヨークベニマルも野球選手やったけれども、みんな野球やめれば売り場に行ったり、野菜切りなんかしているのだ。午前中野菜切りして、午後から野球練習したりして、そしてだめになってもヨークベニマルで籍があると。あるいは、日本生命なんかも相当野球やった選手が支店長なんかになって、それいつごろの話だというくらいの、私そのころ優勝しましたなんて聞いて、生命保険の説明会場に行っても言われて、野球選手やめてもこうやって生命保険のセールスになってやっているのだなというのが。だから、福島ユナイテッドとすればだめになった選手のフォローアップというか、そういうのはどうなっているのだい。

そうでないと、そこら不安だとなかなかいい選手も入ってこないだろうというのがある。

あともう一つ、これは質問ではなくてつけ加えるのだけれども、やっぱり地元選手だよ。金足農業ではないけれども、聖光学院もいいのだけれども、聖光学院もほかから来る人多くて、福島出身は1人だけだなんていうのあるのだよね、ラインナップで。須田優真。そうすると、別な学校だけれども、もしかすると甲子園に行くかもしれないから、地元でバス2台は出さなければならないなんて学校にかけ合って、学校からのそんな金来ないから、俺らでつくって行こうなんて、やっぱり地元選手というの出ると盛り上がるのだよね。だから、そこらもぜひ、これは要望です。希望、要望。今の2点だけちょっと聞かせてください。

(鈴木勇人参考人) まず、1点目のホームスタジアムの関係ですが、今現在J3では問題ない形で使わせていただいております。しかしながら、期限がありますので、2022年までに照明というのは必ずやらなければならないという形です。まずはそれが大前提の中で動いています。そうしますと、今現在J2に上がるためには、どちらにせよ既存のスタジアムを改修するか、新スタジアムという形のこの2つになってきます。その中でではどっちが費用対効果があるのだとか、まちの活性化になるのだというのをこれから議論いただく場が出てくるのではないかなというふうに思っています。その中で大きければいいというわけではないので、非常にコンパクトにいかにかコストを下げることができるかというのが鍵になります。場所も含めてです。私どもJFLというアマチュア最高峰のころは、信夫ヶ丘陸上競技場を使わせていただきました。実はそのころのほうが子供たちの来場者は非常に多いです。

(山岸 清委員) 近いから。

(鈴木勇人参考人) はい、自転車で来れる、急にも来れる。戻って塾にも行ける。しかしながら、あづまは決死の覚悟で行かないと自転車でなかなか行けません。そういうことを考えたときにどうなるかというのが非常に議論あります。かつ先ほど申し上げましたチームがだんだん強くなってきています。今3億8,000万円なのですが、ことし中にももしかすると2位以内に入り、昇格圏内に入る可能性というのが今出てきています。頑張ればですが、それを目指しています。そうすると、本来であれば2位までに入りますと自動的に昇格できます。しかしながら、スタジアムのライセンスを持っていないので、勝っても上がれないという状況なのです。ただ、先ほど申し上げました僕は実行委員会で私を含めていろんなクラブがそれはおかしい、Jリーグの基準が上げ過ぎではないかと、地方クラブはやっぱりいろんな状況があって、震災があったりあって、公共施設に投資するというのは非常にづらい状況にあるというところを話を申し上げているので、もしかすると勝てば上がれるけれども、その間というふうになる可能性があるというところで今この議論が少しずつ大きくなってきて、まずは照明、プラス改修か新スタジアムかという形になってくるということでもあります。

(山岸 清委員) 今の関連で、大笹生はあそこ照明設備あるのだけれども、あれはこっちのソフトボールのほうの照明なのだよな。

(鈴木勇人参考人) 練習やらせていただいている十六沼は照明設備がございしますが、基準で、テレビ放映とかもありますので、1,500ルクスという非常にすばらしい照度が必要になってきますので、普通に練習できるだけではだめなのです。そういう意味では、練習場は環境がいいああいう郊外でやらせていただいて、集中して、できればサッカーをする者については終わってすぐ飲みに行けるとか、あるいはできるだけ子供たちが来やすい場所にある、特にちょっと遠くても公共交通機関に駅から近くて、そこから歩いて行けるとかというところが候補地になるのではないかなというふうに思っています。それがスタジアムです。

次に、プロ選手の話なのですが、数年前まではノンプロの人間もユナイテッドはありました。居酒屋で働いていたり、飯坂温泉で布団を入れたりといって、そうではなくてやっここ数年で全員がプロ契約をしています。しかしながら、まだまだ収入が足りませんので、サッカースクールをNPOでやっていますので、そのサッカースクールをやっていた回数によって費用を出しています。

(山岸 清委員) 先生という意味。

(鈴木勇人参考人) はい、そういうことです。ですから、両方で生計を立てている選手もおります。しかしながら、サッカーで生計を立てているのは確かで、ほかで仕事をしているわけではないというところなのですけれども、平均年齢がJリーガーは26歳です。野球は30歳ぐらいいけるのですけれども。そうすると、その後の生活はどうするのだというのが一番大変なところなのです。J3というのはプロの中では一番下ですので、ここで首になるとほとんど上には上がっていきません。選択肢としては、選手を引退したらクラブに残って営業をやったり、あるいは育成のコーチをやるかです。それも一握りです。育成とかコーチがうまくなければなりませんし、話ができなければ営業もできません。あるいは、企業に行くか。その中でも下のカテゴリー、いわゆるプロではなくて地域リーグとか、働きながらやるという環境もまだまだ残されています。そういうところに移っていただくというのがほとんどかなと思います。

(山岸 清委員) 関連ね。要するに26歳で幾らかって具体的な金額は聞いていないのだけれども、結婚できるような金額はもらっていないというようなうわさなのだけれども。

(鈴木勇人参考人) うわさはいろいろあると思うのですが、うちのクラブでいいますと、茂木弘人という地元の選手がいます。松川出身ですが。彼は、J1から来てくれて、何とか福島のためにやってくれています。彼が一番高い選手で、J1でいたので、ウン百万円という形ですが。

(山岸 清委員) 何百万円。

(鈴木勇人参考人) ウン百万円です。これはなかなか申し上げられない。J1からすると3分の1です。大体ですが、J2ですと年収1,000万円ぐらい。

(山岸 清委員) それならいいけれども。

(鈴木勇人参考人) J1ですと2,000万円、3,000万円が一番下で、そこから上ぐらいになります。J3ですと、もらっている選手で年収500万円から600万円。これがJ2から落ちてきた選手は1,000万円

近いのがありますが、あとはブラジル人がどうだとかいろいろあります。高校から入った選手はなかなか厳しいので、正直月20万円から25万円ぐらいの選手もいます。

(山岸 清委員) 高校卒業ならそのくらいでいいけれども。

(鈴木勇人参考人) ただ、ボーナスがないのです。年俸制ですから。

(山岸 清委員) 二十五、六歳になると大変だな。

(鈴木勇人参考人) ですから、結婚されるというのは非常に大変なところなのですが、だんだん福島で結婚して子供生まれている選手が多くなってきたので、少しずつ環境は改善しているのかなというふうに思います。これはまだまだです。その分選手のうちにC級のコーチのライセンスを取らせるようにしています。その次のステップのためというところなんです。そうすると、我々はスクールを選手が教えますので、J1の選手よりも我々の選手のほうが教え方うまいです。そのぐらいやっぱり教育をするというのも非常に大事なところというふうに思っています。

(山岸 清委員) 野球でもプロ、アマの境なんていって、でも今よっぽどよくなって、プロ野球選手も学校の教員免許取ってなれるとかなっているのだけれども、サッカーの場合もそこらは緩くなっているわけですか。

(鈴木勇人参考人) うちの選手で選手を引退をして教員になっている者もおります。これは福島県出身で、福島東から東海大からうちに来てくれて、大原という選手なのですが、彼は今養護学校の教員になりました。国家試験も取って頑張ってくれていますので、そういう道は何とかつなげていきたいと思うのですが、高校生で入って、J3で例えば戦力外になってしまうと相当つらいと思いますので、うちは高校生を今までとらなかつたというのは実はそういうところがあるのです。

しかしながら、今Jリーグでは今委員がおっしゃっていた地元の選手を保有することという内示があるのです。チームの何分の1を地元の選手で賄ってください、あるいは何分の1を地元に関係した選手でとか、だんだんそういうホームタウンというか、ホームグロウンというのですが、そういう規制もこれからなっていくしますので、そうしたときには福島出身の選手が何名いれるか、そこにいるだけではなくて活躍できるかというのが非常に重要になってくるかなと思います。今の高校サッカーを見ますと、尚志高校のトップトップでトレセンで選ばれて県の代表とかの選手でも、うちに入ると多分プレーができないぐらいのレベルになってしまいます。ですから、福島県出身というのは非常につらいもので、一時期は福島県出身のJリーガーっていっぱいいたのですが、萬代しかり、茂木しかり。今ですと萬代はJ3の長野にいます。いつか戻ってこいという話はしているのですけれども、その後がないのです。大学リーグでも福島県出身者がいないのです。ということは、育成システムが若干厳しい状況にありますので、そこをまずてこ入れしなければならぬかなというふうには思います。

(山岸 清委員) 半端ねえ選手が出るといいね。

(鈴木勇人参考人) はい。ですから、地元の選手という最後の補足のところで要望ございましたので、

それは私どもも何とか地元の選手を多くということは考えておりますので、その際ぜひ応援をいただきたいというふうに思います。

以上です。

(佐久間行夫委員) ご説明ありがとうございました。ホームタウンという考え方なのですけれども、もともとユナイテッドは福島県に1つしかないJリーグチームでありまして、福島県がホームタウンなのかなというふうな考え方もございましたし、最近では平成25年に当時の市長さんとホームタウンという構想の中で福島市がホームタウンとして手を挙げたということではありますが、最近では会津若松市さんとか、中核市になったので、県北全域とのホームタウン構想って、そのホームタウンの考え方をまず教えていただければ。

(鈴木勇人参考人) まず、Jリーグの規定でホームタウンの規定とはというのがございます。これは市町村というふうになっています。ですから、県というふうに言うことは実はできません。そこが微妙なのですが、私どもは下から上がってきているので、もともとは福島市を中心とする県で1つのプロクラブだったものですから、福島県全域という言い方を無理やり使っていました。というのは、福島市だけのチームだというふうに思われるのもどうかなというのも正直ありました。しかしながら、規定としては市町村なので、メインは福島市、会津若松も試合ができるのは会津若松市というふうに進んできて、ここでいわきFCが出てきて全域という言葉が使えなくなってきました。ですので、これから多分福島市を中心とする県北全域になるのか、あるいは福島市、伊達市とかというふうにしきっと設定をしていくのかという形になります。ほかのクラブは、県の全域を何市何町まで全部入れているクラブもあります。あるいは、半分に割ってここまではということで一つ一つ指定をさせていただき、締結しているクラブもあります。毎年毎年拡大をしていっているクラブもあります。そういう意味ではこれからだというふうには思っています。ただ、拠点はやっぱりお世話になったこの福島市を中心とするというのが我々役員陣の考え方です。

(佐久間行夫委員) 例えば横浜市だけでも350万人ですね。福島県全部考えても今190万ぐらいですか。180万台になりましたけれども。そう考えますと、本当に優秀な人材、いろんな意味での資金も含めてやるにはやはり福島市だけで本当に大丈夫なのかな。勝てば人がたくさん集まるというのがありますので、福島市ホームタウンという自分たちの考え方としてもそれだけではなくもっと拡大しながら、やはりいい選手も入ってくれるような、福島県全体に波及できるような、それが福島市もよくなることだなというふうに思うので、その辺はぜひ今後の中で拡大に努めていただければというふうに私は思っています。

(渡辺敏彦委員) 先ほど来話が出ておりました照明設備の設置については、会社としてというか、ユナイテッドとしてどうこうできる話なのか、あるいはスポンサーに出してもらおうとすべきものなのか、行政でやるべきものなのか、みんなで出し合ってやるべきものなのか。なければ2022年にJ3もだめになってしまうのでしょうか。だから、気もまなくてはならない話なのだよ。だから、困ったななんて

いう話ではどうにもならないのではないかと思います。その辺の見通しというのはついているのかな。

(鈴木勇人参考人) 委員おっしゃるとおりで、非常にクラブだけではどうしようもない部分というのが多くあります。そういう意味では、今やらせていただいているのは県営ですので、まずは照明を今の既存の施設につけるといことも並行してやらなければならないところで、福島県のJリーグチームを応援する県議会議員の会というのがございます。ここに要望を出させていただきながら今協議はしていただいているものの、オリンピック等もありますし、これから予算組みもございますので、具体的にまだ動いているということではございません。しかしながら、私どもクラブのほうで概算を考えて取得をしますと、国体のメイン会場で余りにも大きいスタジアムなものですから、相当費用がかかってしまうというのが見えてきています。では、それを2週間に1回あるいは夏場のナイターの時期だけつけるのが本当に費用対効果があるのかというのも議論になっているというふうに伺っています。しかしながら、私どもサッカーで使うだけではなくて、ナイターでやっぱり大人の陸上教室ですか、あれば合宿なんかもできますので、そういう形で多方面でお使いいただくところを視野に入れながら進めなければならないことだと思います。これは民間で寄附といいますとなかなかそういう金額でもない状況にありますので、非常に悩ましい話になります。ですから、本当に課題が多い状況です。

(渡辺敏彦委員) 悩ましい話なのですが、いわきのチーム最近頑張っていますよね。最近は無ナイテッドとやるとあっちのほうの方が勝ったりして、非常に心配はしているのだけれども、あそこも下から伸びて行って、JFLというのだけ、そこに行ってこっちにいる。だから、県内に多分2つぐらいJ3あるところもほかのところあると思うのだけれども、その辺の動きというのかな、向こう金いっぱい持っていそうだから、いろんなことやっていますよね。だから、逆に1つにしてしまってなんて、簡単な考えなのだけれども、その辺との絡みというのはどんな状況なの、今。

(鈴木勇人参考人) 非常にご心配をいただいている部分なのですが、あちらはアンダーアーマーというメーカーさんが直接ついています。ジャイアンツのメーカーもやっている非常に世界的なメーカーです。その日本代理店がドームという会社さんがあります。ここが総代理店になって運営しています。相手方のいわきFCの社長は実は湘南ベルマーレの提携をしたときの社長で、私もすごく仲よかったのですが、急に落下傘で正直来ました。その中で理念が全く違います。あちらはスポーツビジネスということで、オーナーがアメリカのアスリートプログラムを取り入れながらやっていくというのがあちらのやり方で、スポーツビジネスですので、自分でグラウンドも全てつって、商業施設もつくって、お金を見出しながら地域還元をしていく。選手はドーム、いわゆるアンダーアーマーの部分で働いていて、昔の実業団と同じです。働いて、午後から試合、練習をするという形です。ここ数年で今東北2部ですので、ことし優勝します。来年東北1部。そこで、アマチュア最高峰で決勝大会やると、来年東北1部、その次順調にいけばJFLになります。そこでライセンスがうまく取れれば

J3ですので、最短で3年で同じレベルまで来ます。なかなかサッカー界そうはうまくいかないのですが、ただ5年以内には必ず来るかなというふうに私どもは踏んでいます。その中で、でも商圏的にはいわきとこちらの中通りというのは余りかぶらないものですから、そんなに影響することは実はないな、独自の理念でやっていって、J3で戦うこともあるかなというふうに思います。その後一緒になれるかどうかというのはあるのですけれども、あちらはあちらの考え方があるというふうに伺っていますので、多分一緒にはなりたくないのではないかなと思いますし、我々は我々でやっぱり支えていただいた皆さんの思いの地域クラブとしての理念がありますので、それを将来どうするかというのはわからない。しかしながら、経営的に考えたときに、ではどういう合理性があるのか、福島に2チームでできるのかということからすると、それはそのときにやっぱり考える必要が出てくる可能性もあるというふうには思っています。

(渡辺敏彦委員)ただ、スポンサーっていわきのほうにも結構ユナイテッドさんも持っているのかい。

(鈴木勇人参考人)いわきで試合をしていたころも実はありました。2シーズンぐらいやりましたかね。そのころはいわきの会社さんもかなり多くなってきたのですが、いわきFCさんができてからはやっぱり地元を応援するから、ごめんねという声がだんだんできてきていますので、私どももあえて行かないように実はしています。

(渡辺敏彦委員)それは影響がないというふうに理解します。

(鈴木勇人参考人)ただ、何でも自分でつくっていますので、スタジアムも多分いわき市のほうと一緒にやるというふうにおっしゃっていますので、それが動向的にはどういう形になるかというのは心配な要素ですけれども、でも余り気にせず我々は我々で独自にやっていく。しかしながら、天皇杯では負けないというところを頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

(渡辺敏彦委員)それぐらいいわきのバックアップしている、それぐらいの事業所というのか、全農とかがついているけれども、それぐらいのものがつくなんていう可能性はないのかね。

(鈴木勇人参考人)先ほど申し上げましたとおり、福島県内だけの企業さんでは正直いっぱいいっぱいになりつつあります。そういう意味では、今県外に私ども出ていかせていただいて営業しています。非常にサッカークラブをやりたいという企業さんは実はベンチャー企業に行けば行くほど多いです。でも、やってみただけでも、難しいから、やめたと言われると、これは非常に辛い状況になりますので、私どもは経営判断をきちっとしなければならぬというところで、仮にでは大きなスポンサーが来ます。そこでまちのため大もとなっていていただいて、東北楽天さんのようになることが可能であれば、あるいはDeNAのようになることが可能であればそういう経営判断はしようというふうには思っています。そういうところを今募集をして、1件1件私どもで歩かせていただいているというのが正直なところなんです。ぜひご紹介いただければと思います。

(菅田憲孝委員)ありがとうございます。非常に観光のPRですとか、幅広くこの福島市にとってすごく有益な活動をしていただいている、夏でいうとモモ育てて収穫したり、いろんなことをやって

おりますけれども、私がちょっと何となく聞き及んでいる範囲ですけれども、例えば商店街とかでイベントとかをやりたい、あるいはちょっと何かタイアップしていきたいなんていった場合に、例えば一商店街とかでやるとなるといういろんな、ユナイテッドFCさん忙しいだろうから、季節的な部分もある、あとは費用の部分があるとか、いろんななかなかわかりづらい部分というのがタイアップの上であると思うのですけれども、その辺というのはユナイテッドFCさん側からするとどのぐらいまで大丈夫というか、日程的な部分も含めてどんなものなのかなと。そういう地域貢献にどのぐらい時間というのはとれるものなのかなというのがわからないのですけれども、教えていただきたいと思えます。

(鈴木勇人参考人) ありがとうございます。私どものほうでは、地域貢献活動というのはまだまだやれるというふうに思っておりますし、お話をいただきたいというふうに思っています。試合があります。例えばアウェーの試合は選手を全員連れていくわけではありません。その間にスタッフも残って地元で事業を展開できる仕組みもつくりました。そういう意味では、試合やっている最中でも地元では何かしらイベントに参加するというのは可能でございますので、ぜひご相談をいただきたいというふうに思っています。これから、マスコットというのがまだありませんので、これをクラブのマスコットをつくりますと地域貢献活動にどんどん、どんどん町なかに出ていくことができます。ふれ合い活動もできますので。ただ、その費用を捻出するのか、トップに使うのかというのは今はそういう形で、機が熟したらマスコットをつくろうと思っておりますので、ぜひ商店街でそういうのがあれば活躍できればというのは非常にあるのではないかな。

ちなみに、11月に駅前通りを含めた商店街の皆さんでイベントを1つ企画をしています。これは、パブリックビューイングをやりながら、駅前のイベントに合わせて我々ユナイテッドのイベントをやる予定でございますので、ちょうど福島市のスペシャルマッチとかぶるかもしれませんがけれども、そんな試みも今から準備をしていますので、これが福島市にとっては非常に大きな町なかでのコラボイベントになるのかなということで、見ていただければ次の可能性というのが見えるのではないかなというふうに思っています。

以上です。

(菅田憲孝委員) あと2点ほど、ちょっと失礼な質問になってくる部分もあるかもしれないのですが、いろいろ委員の中でも話している中でユナイテッドFCチームに対する市民の認知度とか定着度、こういったところはやっぱりなかなかまだまだだなという部分を正直感じている部分というのがあります。今社長のお話の中で強くなることによるよい循環、勝つことによる循環ですとか、J2に上がっての好循環が生まれるとか、市民に定着していく理由とか条件というのはスタジアムも含めてお聞かせいただいたのですけれども、それ以外の部分でもうちょっと身近なところで市民への定着をしていくために社長が考える部分での何かあればお聞かせいただければと思ったのですけれども。

(鈴木勇人参考人) クラブとしてはかなり積極的にまちに出ているつもりではあるのですが、今おっしゃっていただいたとおりまだまだ知らない方も多い。どこで試合やっているのとかあります。ですから、かなり選手がまちに近い部分にいないとならないのではないかなというふうに思っていますので、全体で動くだけではなくて、その選手がみずから足を出向く、我々スタッフだけではなくて一緒にまちを歩く。やっとならぬと張りたいという名目でボランティアの方々と選手、スタッフが一緒に駅前通りで後半戦のポスター張ったりとか、飯坂町を歩いていただくであったりとか、そういう活動もちょっとやる必要があるかなと思います。

プラス広報の部分がまだ弱いのです。これは、SNSも少しずつ始めていて、ツイッターも出していますが、そういうところの専門家も入れていただき、広報戦略の部分の一つつくることというのが非常にこれから必要ではないかなというふうに思っています。これは、市の広報あるいは市のスポーツとクラブと一緒にやってもいいでしょうし、地域スポーツと一緒にやってもいいでしょうし、そういうところが大事かなというふうに思っています。クラブをやっていることが知られていないということもございますので、先ほどのホームタウン協議会のようなものを立ち上げていただいて、そこでクラブも入る、行政も入る、まちの方も入る、議論をしてどうやって私どもを使っていたかというのができればなお活性化していくというふうに思っています。

以上です。

(菅田憲孝委員) 私から最後になりますが、今のような取り組みというのが民間主導で頑張ってやっていくのか、あるいは行政でも全面的にサポートするのか、その辺というのもあるとは思いますが、我々が調査した中で例えば行政、福島市でユナイテッドFCさんに支援している内容なんていうことで伺ったのですけれども、サッカー場、市の競技場等の使用減免とか、あとはペットボトル、お水をお渡しするとか、応援の横断幕を寄贈したとか、市政だよりによる広報だとか、サポーターズクラブを市役所内に設置したとか、交通安全ポスターへの選手起用、東口広場に応援看板の設置とか、いろいろそういう部分聞いたところだったのですけれども、実際とはいえいろいろ社長もほかの球団とかかかわってくる中で他市事例等を見てきていると思うのですけれども、サッカー場とかハード面、照明とか聞きましたけれども、行政に対してどのような支援というのがさらにあると望ましいのか、支援の、あるいは支援に要請をかけている部分とか、既に。あれば教えていただきたいと思ったのですけれども。

(鈴木勇人参考人) 先ほど連携の案というのを出したもののほかに、実は集客も兼ねるのですが、今の会場が遠いものですから、独自でシャトルバスを出しています。こういうもの交通機関を使う部分に対してできれば集客、にぎわいというところで行政の皆様の補助が少しでもあれば、もっともって来やすくなる環境づくりができるのではないかな、あるいは遠くからお越しのアウエーのサポーターの皆様の足というのが非常にづらい状況にありますので、そういうところで利用いただき、交通機関を使っただけであればもっともっていい形になると思いますので、そこがまず1つかなと。

2つ目は、やはり地域の物産と、福島のPRというのを私どもは本気で考えていますので、そこに對してあのようなふくしまピーチマッチのようなものを企画をいただいて、そこに私どもをつけていただき、その運営を任せていただくですとかというのが2番目です。ユナイテッドカップというのがあって、これは委託を受けまして飯坂温泉に泊まっていたという企画があるのですが、ピッチの数が少ないと来ていただく試合の数が少ないのです。それを広げるためにはそういうのも必要だと思います。

プラス、ことしやったばかりなのですが、OYAJIカップというのも市の委託をいただきました。これは、大人がサッカーをする人間結構多いのです、趣味で。そうすると、サッカーするだけではなくて、その後、終わった後の会食であり飲み会というのが楽しみでやってくる方が多くて、これは温泉に泊まってもらったらそれまでですので、中心市街地のホテルに泊まさせていただきました。そういう補助を出していただいて、中心市街地の活性化につなげていただくという例が、当時初めてやったのですが、まだ4チームなのです。それを少しずつ広げていって、まちに泊まらせていただき、そういう宿泊の補助を得てまちに繰り出す、まちの夜のにぎわいを創出するということでご尽力いただければありがたいというふうに思っています。今考えているのはそんなものかなと思います。

(佐々木優委員) ありがとうございます。ジュニアのチーム、ジュニアユースとジュニアあるというふうにおっしゃっていたのですけれども、サッカー人口が今どんな状況にあるのか、それからこの後どんな展望を持っていらっしゃるのかということをお聞きしたいなと思います。今の社会的な状況からいってサッカーをできる人口が今後どういうふうに動いていくのかとか、する人だけではないですけれども、そもそもサッカーをする人たちがどういうふうに動いていくのかというのは結構重要なことだと思うのです。なので、そこについてお聞きできればと思います。

(鈴木勇人参考人) まず、サッカー人口でございますが、全体的に少子化になってきています。これは進みます。その中でではサッカー人口はふえるかということ、そうでは多分なくなってくるだろうというふうに思います。ただ、サッカー人気というのはやはりワールドカップが4年に1回あるごとに活性化していきますので、極端に落ち込むことは多分ないのではないかなというふうに私どもは理解しています。数に対しては具体的には申し上げられませんが、その中で地域のサッカークラブも今1チームだけでは運営できない状況が数チーム見受けられます。これ合同で練習をしているですとか、試合に出る、高校野球も今同じ話で、ある高校とある高校が連合でやっているとか、だんだんそういう機運にはなってきています。そのときに各自でやるのは結構大変ですので、受け皿として私どもがなればいいのかというふうに思っていますし、どこの中学校、どこの小学校に入っている我々に入れる仕組みというのを今つくろうというふうには思っています。展望でいいますと、まだまだ地域クラブのユース年代のサッカー感というのが福島の方体感したことがありませんので、イメージが多分湧かないと思うのです。そのためにもいい選手が福島から輩出し、どういう形で育っていくかという追跡と、あわせて告知、公表の仕方というのが非常に大事になってきていますので、できればこ

数年で下のチームから少しずつ上がって行って、自前の選手を一人でも出すことができれば、それを目指して活動ができるのかなというふうには思っているのですけれども。

もう一つ、最後にJリーグは今育成というのに非常に力を入れようとしていまして、フットパスという、ちょっと聞きなれない言葉なのですが、世界水準の育成クラブを基準にしようとしていまして、うちにもヒアリングが来ています。その中で福島ユナイテッドの育成がどうあるのかという評価をいただいたところ結果が出まして、Jリーグの中では環境面含めて一番最低の今レベルにあるというのが正直なところなのです。ですから、トップチームだけではなくて、やっぱりここは育成の部分も我々クラブとしては力を入れて、これは地域の皆さんと一緒にやっていく必要があるのかなというふうに思っています。ちょっと具体的には申し上げられませんが、このような形でよろしく願います。

(石原洋三郎委員長) ほかがございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) なければ以上で質疑を終了いたします。

この際、参考人の株式会社AC福島ユナイテッド代表取締役、鈴木勇人様には、委員会を代表いたしまして一言お礼を申し上げます。本日はお忙しい中、経済民生常任委員会にご出席くださり、また貴重なご意見を述べていただきまして、誠にありがとうございました。特にさまざま課題を教えてくださいまして、今後どのように行政、市のほうで取り組んでいくべきなのか、そういった課題も浮き彫りになったのではないかと考えております。また、もちろんサッカーということだけではなくて、スポーツという広い視野の中で地域密着というところも根差して上達していくことを目指されているということもございまして、今後7年前に苦しんだ福島市が、御社のチームが強くなっていくことによりまして、福島市民の希望になっていけばいいなと本日お話を聞きまして思った次第でもございます。今後ともますますのご健勝をお祈りするところでございます。本日は誠にありがとうございました。

それでは、ここで暫時休憩いたします。

午後3時41分 休 憩

午後3時50分 再 開

(石原洋三郎委員長) 委員会を再開いたします。

以上で本日の参考人招致を終了いたします。

それでは、本日の参考人招致の意見開陳を行います。

本日聴取した項目に関してご意見のある方はお述べください。

(黒沢 仁委員) くしくもさっき一番最後に菅田さんが聞いた、今まで地域社会と一体化して協力してきたのだという話十分聞かされました。そういった意味においては、福島市もそれなりに協力はし

ただのだけれども、実際これから彼たちが求めるような支援の仕方ってどうなのだとしたら、先ほど言った公共交通、アウエーの人たちをどうして運んだらいいか、それによってある意味では資金繰りの一助にもなるだろうというようなことと、資金繰りにいっぱい困っているという部分で、民間のほうの協力してくれる企業も県外のほうに求めているというようなことで、やっぱりいろいろ苦労はされているのだなという思いを抱くと、市としてどんな本当の意味での支援の仕方ができるのか、やっぱりこれ本気になってちょっと考えてくれないと、さっき言った照明の問題、2023年までに照明設備を整えないとJ3の資格がなくなるということなのでしょう。そういうようなことは極力避けるためにもやっぱり民間の協力は必要だけれども、では行政としてこれだけ地域一体化して進めてきたこのサッカーチームをなくすわけにはいかないから、そのところはやっぱり市としてできる援助を本気になって考えていかななくてはならないのかなというふうなことで聞かせていただきました。

以上です。

(斎藤正臣委員) やはり高校生のユースチームをつくるにしても、J3を維持あるいはJ2に上がっていくにしても、練習場所の確保とホームスタジアムの確保、これがまず第一の条件になってしまうというのは、やはりそうなのだなというのわかりました。2022年まで新しいサッカースタジアムをつくるのなんて期間的に難しいのではないかと思うのです。やっぱりできることとできないことをはっきりさせたほうがいい。それを協議、検討する場を早く設けて、それは県も巻き込まないといけないことだと思いますし、それを早目に、先ほど他委員もおっしゃいましたけれども、困ったなという段階ではもうないのではないのかなというふうなことを強く感じました。

以上です。

(山岸 清委員) 要するに県のあそこのスタジアム、あそこに照明つければいいのかではないの。これを県も市もよく相談しろと、三位一体で。

【「県でやればいいんだ」と呼ぶ者あり】

(山岸 清委員) いや、そうもいかないでしょう。県が半分、市が半分。

【「ホームタウンというのが福島市という考え方なんだろうから」と呼ぶ者あり】

(佐久間行夫委員) 私先ほど社長に聞いたように、ホームタウンという考え方は広げてもらって、例えば福島市だけ29万ではなくて、今広域連携の時代でしょう。会津も含めていわき以外全部連携とって、みんなで盛り上げていかないとだめだという機運をつくったほうが、福島って意外と何の競技でもいまいち盛り上がり欠けるのだよ。熱中しないのだよね。そういう意味でやっぱり広域連携のようなホームタウン連合会、協議会みたいなのをつくって、各市町村長も含めて全部が応援するのだという機運を高めないと、福島市だけで何とかしなくてはいけないばかり考えていても、意外と今までがそうだったようになかなか盛り上がりこないのかな。そして、いわきになんか負けられるかというふうな、そういうふうなそれぞれの地域の頑張りが芽生えてくるといいなというふうに思います。

そうすると、福島市だけ農産物売るだけではちょっと品物が少ないのだよ。会津のものも、あんば

柿も相馬の魚も一緒に全部売ったほうがこれから経済効果が大きくなるし、それを福島市で売ればなおさら福島市の経済効果上がるから、そういうふうに経済効果に持っていくような連合体をつくっていくというのがいいのかな。そうすると、金が回ってきて、人が回ってくると。ただ、先ほどユースは早くつくらなければだめだね。尚志学園あたりでやってくれなければだめだね。県立高校では無理だよ。

（佐々木優委員）先々の心配事がわかったといえはわかったのですけれども、ただそこに対して市民全体のユナイテッド福島というところの応援しようという機運というのはまだまだ、応援の人数からしてもまだまだ平均1,600人ぐらいなので、やっぱりもっと前にやらなくてはいけないこと、広報とか宣伝とかというのが、そしてあとやっぱりそういう気質とかも関係しているのかなというのをちょっと思うのですけれども、福島市で何かをわっとやろうというのってなかなか本当に難しいなというのは私も思っていて、ただやっぱりそこをだからといって行政が何かすればいいというものでもないと思うし、どうやって一緒に広めていくかというまずは市民との関係を考えないとやっぱりあれやります、これやりますというふうにはならないと思うので、広報の手伝いをするとかという、今までやってきたかもしれないのですけれども、そこをすっ飛ばしては難しいのかなというふうに思います。ただ、例えば公共交通の補助を欲しいという、それは確かにそういうのもあってもいいのかなというふうに思いますし、それから子供たちとの関係、例えばジュニアとかジュニアユースとかってやっぱりお金がある、なしで結構左右されると思うのです。なので、やりたい子はみんな参加できるような、そういう仕組みづくりを行政で手助けすることができないかとか、そういうところで子供たちの夢とかそういうところに焦点を当てるのだったら、そこで何かしらの補助というか、できるかどうかとかって考えてもいいのかなというふうに思います。ただ、これサッカーだけの問題ではないのですよね。いろんなところで、取っかかりとしてはサッカーかもしれないのですけれども。

（後藤善次委員）コマーシャルの先頭に立っていただくというのは一番ですよ。あの方たちが何か宣伝をすることでそれに注目をしていただくと。あれありましたよね。この間メンバーが1人減った。

【「TOKIO」と呼ぶ者あり】

（後藤善次委員）TOKIO、あれもやっぱり復興福島をアピールしてくるのに彼らが有名だから、福島が注目されるわけですね。だから、ユナイテッドもなかなかサッカーという競技になじみのない方たちが取っつけられない部分もあるのかなと。だから、サッカー選手であることと同時に福島の有名人という、そういう位置づけになっていかないと物をアピールしても効果がないというのか。いろいろと照明の問題とか後継者とか、いろいろな問題は企業としてあると思うのです、成り立っていくのに。ただ、私たちがテーマとして考えているのは、行政としてどういうふうに彼らを利用する、あるいは応援していくという、そういう角度を考えていくと、今ちょっと触れていただいたように、宣伝効果としてメリットのある人たちに私たち自身もやっぱりいろんなポスターの中に入れてたり、イベントごとに、今随分説明がありましたけれども、ああ、この人たちがサッカー選手なのだなというような、

そういうことをどんどん、どんどん前を出してあげる機会をつくっていくということが大事なのかなという気がしました。

(菅田憲孝委員) 質問もしましたけれども、とにかく球団としては震災後の福島の思いとか、いろんなそういう部分も持って、プライドを持ってやってきてくれているのだなということで、非常に本市を盛り上げようとチームが動いているのもわかりました。ただ、一方で今後藤委員も言ったようないろんな知名度とか有名度とかというのも大事になってくるかと思うのですけれども、とにかくできることをやっていくしかないということと、ホームタウン協議会なんかを立ち上げていただいていることですので、例えば仙台あたりも協議会があるということで、市長が会長になっていろいろ地域で盛り上げよう、地域でどうしてほしいか、そういうビジョンをしっかりと方向性示していくという観点からすると、まずチームの温度というものにやっぱり市民の温度をできる限り追いつかせていくことも大事なのではないかなと思いますので、そういった外からの応援策というのをしっかり考えていかねばならないのかなというふうに思いました。

(石原洋三郎委員長) では、意見の開陳は以上でよろしいでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) 何もなければ、次回の委員会で本日いただいた意見のまとめを行いたいと思います。

次に、そのほかに移ります。

まず、次回以降の委員会日程についてであります。9月以降の委員会日程を協議しておりませんが、次回の所管事務調査に関する委員会は9月定例会議中の委員会審査の日、9月13日木曜、14日金曜のどちらかで開催したいと思いますが、いかがでありますでしょうか。

(山岸 清委員) あしたの委員会は予備でとっていたのだね。

(石原洋三郎委員長) あしたはないです。

(山岸 清委員) これ委員会中だね。

(石原洋三郎委員長) そうです。委員会中です。

(山岸 清委員) オーケー。

(石原洋三郎委員長) それでは、そのように進めさせていただきます。

また、行政視察の候補地に関しまして正副案をまず配付させていただければと思います。ある程度ピックアップをしたところであります。

【資料配付】

(石原洋三郎委員長) 一応正副案としまして6案ほど提示させていただいているのですが、この案の中から3つほどまた絞り込んでいきたいと思うのですが、何かご意見ございますでしょうか。

(山岸 清委員) 福島と人口規模一緒のところがいいのではないですか。余り大きいところも財政規模違うから。

(佐久間行夫委員) 私何年か前視察で町田市行ったのよ。議長さん対応してくれたのだけれども、福島さんもJ3になって、我々町田と一緒に戦いますねなんていう話したのです。我々一生懸命町田のチーム自分たちも一生懸命応援しているので、福島と戦うのが楽しみなのですがと言っているうちにJ2に上がってしまったのだよね。その辺は何が違うのかと思って。

(山岸 清委員) 町田も入れておいたらいい。

(佐久間行夫委員) 町田も候補でいいのではないの。

(山岸 清委員) 町田は東京都なのでしょう。

(石原洋三郎委員長) 東京都です。

(佐久間行夫委員) 川崎より近い。余り川崎だと大きいのではないのかと思って。町田に行ったときにその話ですっと持ち切りだったから、俺が視察行ったら。何の視察行ったか忘れてしまったのです、それで。我々もぜひ町田がJ2になるために必死になっているのです。

(後藤善次委員) この中でもJ3で同じように照明がないではないけれども、設備的なところで何か調整をしてなつたところがあればその話を聞ければ。

(書記) 今回候補で出させていただいている6案なのですが、ちょっと文章量が多くて後ほどお読み取りいただければと思うのですが、各チームは必ず経営危機に陥ったところであったり、地域密着が進んでなくて、結果的に今地域密着が図られて定着したなんていうチームを中心にピックアップさせていただいたところです。

(山岸 清委員) 一回読んで、この次で。

(黒沢 仁委員) 迷ってしまうよ。

(佐久間行夫委員) 正副委員長一任だね。

(黒沢 仁委員) 最終的には正副一任。

(石原洋三郎委員長) 正副一任で、町田のほうも調べてみながら。

(佐久間行夫委員) 議長さんがずっとそれを切々と言ったというのは、議会も含めて頑張ってくれたのだなと俺思ったから。大体東京近辺とか関東近辺なら意外と午前と午後で回れたりもできるし。

(黒沢 仁委員) 2つずつね。

(佐久間行夫委員) うん。

(石原洋三郎委員長) そうですね。そういうことも考慮しながら、基本は最低3つなのですけれども。

(佐久間行夫委員) 川崎のその辺だったらずっと回れるでしょう。

(石原洋三郎委員長) ただ、先方の都合や行程の絡みもありますので、何とか正副一任で。

(山岸 清委員) 正副一任、了解。

(石原洋三郎委員長) なお、次回は本日の参考人招致のまとめと、また行政視察の候補地の協議もできればと思いますので、よろしく願いいたします。

そのほか委員の皆様から何かございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(石原洋三郎委員長) なければ、以上で経済民生常任委員会を終了いたします。

午後4時11分 散 会

経済民生常任委員長 石原 洋三郎